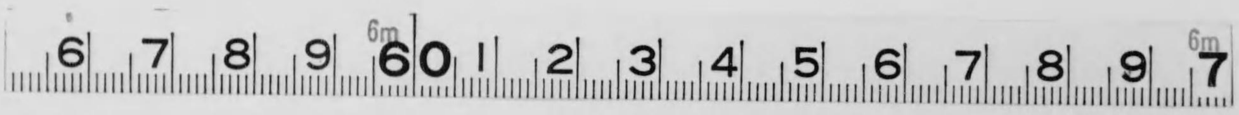
始点



391
111

小泉信三君に贈る

旅情

水上瀧太郎著

大正
8. 11. 28
内交

旅情目次

汽車の旅　一——九〇
大都の一隅　九一——一五二
ベルファストの一日　一五三——二〇一
新嘉坡の一夜　二〇三——二六九
霧の都　二七一——二九二

汽車の旅

税關の檢査が濟むと、横濱以來同船の客はちりぢりになつてしまつた。

「左樣なら」

「さよなら」

日々に云ひかはして、或者は自働車に、或者は馬車に乘つて走り去り、或者は重い荷物をかついで歩いて行つた。數分間、その人々の後姿は、思ひ切つて晴れた十月の朝の日光を浴びて見えたが、間も無く、自分の目の前に横はつてゐる見知らぬ國の見知らぬ市の中に吸ひ込まれてしまつた。

自分は此の二週間の航海中いゝ飲友達だつた船員と一緒になつて、今夜の最大急行の出る時間迄別段何を爲る目的も無い身體だから、此のシアトルの日本町の日本料理屋の一室に別離の宴を張る事にきめた。

自働車で運ばれたその家は、外部は純然たる西洋造だが中には日本座敷もあつて、案内役の船員はよく知つてゐた。

日本の酒が出て松茸の御飯を喰べたが、それでは濟まないで、とうとう夕方迄動かなくなつてしまつた。四十女の癖にお白粉を塗り立てた女將を初め、何れも亭主持で此家に通つて來るのだといふ女中が、身體につかない洋裝で出て來た。田舍訛のはげしい言葉つきから、行儀作法を辨へないで、しかもその不作法が客に喜ばれる所以であると思つてゐる女を、自分の宿性が承知しなかつた。

防腐劑で味の變つた酒の醉に一座の聲が高くなつて來ると、彼等は三味線を持つて來て淫らな流行唄をうたひ出した。上機嫌の船員もかはるがはる聲を張上げてうたつた。

「貴方もおうたひなさいな」

女中の中で一番若いのが撥を取上げて云つた。

此の女は此家の女中の中で一番器量がいゝので、船の人々は未見の者さへ名前丈は聞覺えてゐる位ださうだ。從つて他の女中などを見下して、何から何迄自分が取りしきつてやらうといふところがあつた。

「俺はうたなんかうたへないよ」

自分は又盃を取上げた。

「なんて野暮なんだらう、此人は」

女はいきなりいやつて程自分の背中をぶつて、三味線をうつちやるやうに置くと、自分の膝の上に乘るやうにしなだれかゝつた。

盃のふちをあふれて酒がたらたらとこぼれた。

「うるさい。馬鹿ッ。あつちへ行つてろ」

自分は女を突飛した。意外に大きな聲で怒鳴つてしまつたので、少々醉つてゐるなと氣が付くと酒が頭に上つて顏が赤くなつた。

「マア亂暴だねえ。何がいやなのさ」

女はまだ冗談めかして故意としつゝこく寄添つて來る。その客に馴れて身の程を忘れた厚白粉の面が憎かつた。

自分ははしたなく聲を高くした後の不快をまぎらす爲に手酌で飲んでゐたが、女の此の神經の鈍い圖太い態度が我慢出來なくなつた。

芝居じみて居ると思ふ程きちんと坐り直してから、故意と低い落着いた聲で云つてやつた。

「他ぢやないが、お前達がいやなんだ。其處いらに居られると小汚なくつて酒がまづい。後生だから彼方へ行つて貰はふぢやないか」

一座は急にひつそりした。

「生意氣云つてやがら」

女はそれでもまだ冗談だかほんとだかわからないので、自分の顔を見詰めてゐたが、思ひ出したやうに立上つて、やけに左右に身體を振り立てゝ出て行つた。

「マア酷い」

他の女の一人がつぶやいた。

皆が自分を見守つてお座が白けた。自分はてれかくしに酒を飲んだ。女が自分を不愉快にしたよりも、自分が自分を不愉快にしてしまつたのだ。

「ありがたい。よく云つてくれた。小汚なくつて酒がまづいは嬉しい」

突然、一人が興奮した調子で叫んだ。

「貴樣達も退散しろ。俺達ばかりで飲むんだ」

「愉快だ。飲め飲め」

もう一人の男はふらふら立上ると兩手をひろげて踊る眞似をして又直ぐに坐つて怒鳴つた。

それから吾々はさかんに飲んだ。手を叩くと酒が來た。一人倒れ、二人倒れ、三人とも倒れてしまつたのを、自分は妙に醉へないで、窓際の壁に背をもたせて眺めて居た。

他人と酒を飲むと、その人の苦勞も無く醉拂ふのを見て、醉拂へない自分がなさけなくなる何時もの心持が、今日は殊に強く自分に迫つて來た。二週間の航海の間一度も感觸を害する事なく

親しんで來た目の前の人達が、此の壁にもたれて居る自分とは沒交渉に、醉倒れて寢てしまつたのが堪へ難き迄寂しかつた。

其處いらに殘つてゐる德利をひとつひとつ振つて見て、夙に冷くなつた酒をぐいぐい飲んで、悉皆空にしてしまつたが醉へない。一人の男の鼾が正しい韻律を保つて耳について來た。

よりかゝつた窓の外は眞青な空を頂いた清澄な秋であつた。露に脆い並木の樹木の葉は早く紅葉して絶間なく枝を離れて落ちて、敷石の上をかさこそと風に吹かれて走つた。その青空を仰いでも、その落葉の聲を聞いても、秋だと思ふ心の底に、故郷に遠い事、父母に遠い愁がしみじみと浮んで來る。いやな思ひをして手を叩かなければ、もう酒も無い。自分は孤獨の旅人だといふ感じが胸を壓して來る賴り無い自分一人をなつかしみながら默然としてうなだれた。

日が沈んで風が冷くなつた時、夕暮はもう窓のそば迄音も無く忍んで來てゐたのである。室内の電燈がひとりでにあかるくなつたのに驚いて時計を見た。

「さあ愈々お別れだ」

自分は立上つて醉拂ひの肩をゆすぶつた。

「まだいゝ、まだいゝ」

と三人は同音に叫んだが、それでも疊の上に正體も無くぶつ倒れてゐた身體を起して目を見開いた。

「まだ早いでせう」

ぐらぐらゆすぶれる上半身の中心を取りながら一人は時計を出して見た。

「オヤ、もうこんな時間か」

その一人は驚いた表情をして皆をかへりみた。

他の者もみんな誘はれて時計を出して見て、同じく時間の意外に早く經つたのに驚いた。

「愈々お別れかなあ」

一人はほんとに別れともない調子でつぶやいた。何となく寂しい心地が半醒の鈍い心に泌みて來て、吾々は互に顏を見合せて默した。

「兎に角もう行かなくちやあならない」
自分は又時計を出して見て云つた。
「オオイ誰かゐないかあ」
と一人は圖抜けて大きな聲で叫んで、叫んだ後で欠をした。
「何か御用」
女將の醜悪な顔が入口から覗いて訊いた。
「麥酒だ。……それから停車場迄馬車を一臺。すぐだよ」
一人が怒鳴るやうに命じた。
「私達、入つてもいゝ」
と又女中が二三人來て坐つた。
「この人ほんとに憎らしい人だよ」
その中の一人は顎で自分を指して、眞面目な顔を作つて云つた。

「お多賀さんたら泣いて口惜しがつてたわ」
「勝手にしやがれ」
自分は勢ひよく玻璃杯を取つて目よりも高く捧げた。電燈のあかりで麥酒は金色に輝いた。
「御機嫌よう」
「御機嫌よう」
「君の健康を祝す」
かちりと觸れ合せて滿を引いた。
「行かう」
玻璃杯を置くと直ぐ思ひ切りよく立上つた。
荷物は先に停車場へ送つてあるので、何の心配も無く吾々は馬車に乘つた。
「では御機嫌よう」
「御機嫌よう」

女將や女中は送つて出て、馬車の上の自分に手を差し延べて握手を求めた。もう此の女達にも二度とは逢ふ時も無く別れて遠く行くのだと思ふと、自分を苛々させた彼等の存在も問題ではなくなつて、唯單に自分が心細い旅に上るのだといふ心持から、いつそ懷しく一々その手を握りかへした。

馬車が動き出すと夜の空氣は冷々と醉覺めの顏に觸れて、街路の燈火が目に泌みるやうに輝き出した。

「さよなら」

なほ甲高な聲が叫ぶので、ふりかへると、彼等は其處に佇んで半巾を振りながら見送つて居る。

「オイ、あれはお多賀だぜ」

船員の一人は、彼等に答へて帽子を振つてゐた手を止めて指さした。見上げるとその家の二階の窓に、半面に燈火の光を浴びた女が立つて見下して居る。

船員は何れもその方に向つてからかふやうに帽子を取つて振り立てた。と、向うも上半身を危

い迄外に出して、これも夕闇に白く半巾を振つた。

どういふ心持でその女がさうしてゐるのかわからなかつたけれど、今になつて考へれば自分の所業の非道かつたと思ふ悔が、自分をしてその女を憐れませた。それでも自分の强情は他の人のやうに帽子を振つて答へる迄には自分を誘はなかつたのである。

町角で馬車の曲る時、未だその窓に見える女の姿を活動寫眞の映畫の一部のやうに見たが、それつきり吾々の馬車は大通りの繁昌の中に走り入つた。

馬車自働車電車の騷然と入り亂れてゆきかふ間を拔けて、危い迄左右に動搖する馬車の二頭の馬は、白い鼻息をところどころの闇に殘して急ぐ。兩側のあかるい電燈に映し出された店々の飾窓は照り返へすやうにまばゆく、夥しい人出は狹い人道を埋めた上、車道にも波頭のやうにあふれてゐた。

それらの光景が走馬燈のやうに映つては廻つて行くのを、今朝からの疲勞に眠くなつた自分は夢うつゝに見て過ぎた。

停車場に着いて、預けて置いた荷物を受取り、更に赤帽に頼んで汽車に積み込ませ、不知案内の身の不得手な英語を氣にしながら、驛員を捕へて、紐育迄行く途中乘替があるかどうか、又若し氣の向いた場合に途中で下車しても構はないかなどゝ心配になる事々を、それからそれと尋ねてゐる中に僅の時間は早くも盡きてしまつた。

自分は客車の窓から顏を出し、三人の見送人はその窓にひつたり寄つて顏を見合せたが、もう誰も口をきく者は無かつた。たゞ別離に伴ふ淡い哀愁が四人の心をひとつに結びつけてゐるのであつた。

汽車は遂に動き出した。

「さよなら」

「御機嫌よう」

口々に叫びながら二三間ブラットフオオムを走つた三人も及ばなくなつて立止つて、手に手に高く帽子を振り立てたが、間も無くそれも見えなくなつた。窓から乘出して見ると何處が停車場

か、それさへわからず、たゞシアトルの町の燈火が、秋の夜の大空に照りかへすうす紅のあかりが漂つてゐるのを見るばかりで、やがて汽車は暗闇の廣野に向つて急速力を出し始めた。

廣々とした客車の中に、自分は心細く默しながらも、初めて乘つた外國の汽車の物珍しさに臆病な好奇心を抱いて居た。自分の乘つた室は意外に空いてゐて僅かに四五人の相客を見出したばかりであつた。それも一人一人の座席が遠く離れ離れになつてゐるので、道連らしい親しさよりも、行手の旅の長い事を一層深く想はせるのであつた。

一人の黑坊が此の客車の前方の扉をあけて入つて來た。その男はその戸口よりも丈も幅も大きかつたやうに思はれる偉大な體軀を運びながら、これは又柄にも無い愛想笑を浮かべて叮重に吾吾の切符を改めて、又次の室に移つて行つた。

ふと氣が付くと、あちらこちらに默々として一人を守つてゐる乘客が、自分に對して好奇の目を以て注視してゐるやうな居心地の惡さを覺え始めた。

自分の方に背中を向けて居るのは別として、坐つたまゝの自分の位置から斜に、向う側には一

人の老人が居たが、汽車が動き出すと直ぐ新聞を開いて讀み始めた。けれども彼は五分十分間を置いては、新聞のかけから自分の方を物珍しさうに盗み見る。その物珍しさは侮蔑を伴ふ物珍しさである。さうだ、さうに違ひないと思ふと、その老爺の顔を見返へしてやらないでは承知出來なくなつたが、此の反抗心は更に自分を不愉快にした。

向うの隅には、つばの廣い黒い帽子を斜にしてゐるので、光線のかげになつてゐてわからないが、若い女が一人乘つて居た。重さうな黒い外套に黒い毛皮を襟に巻いて、その中に頤を埋めて、膝の上の赤い表紙の小形の本を讀んで居た。

誰を見ても自分とは全く没交渉な異國人である事から、此の時は殆んどお互に人間であるといふ同種の意識さへ持つ事が出來なかつた。

時計を出して見たが、まだ寢るには早過ぎるので、鞄をあけて、船中で讀みかけた本を取出したが、開いたまゝでどうしても文字をたどつて行く氣にはならなかつた。汽車の動搖でうごめいてゐる無數のABCが、ひとつも意味をなさずにちらちらするのを見てゐる中に眠くなつた。

はつと思つた時、手にした本は滑つて落ちて音を立てた。居睡つたなと思つて赤面してあたりを見廻した時、その老爺と視線が合つた。どぎまぎして本を取上げて開くと、それが逆さまだつたので一層氣まづくなつて、二三枚手早く頁を繰つたが、どうしても意味を取る事が出來なかつた。

本を置いて、窓にもたれて外を見ると眞暗で何も見えない。何時の間にか又居睡つて、二度三度窓硝子に額をぶつゝけた。遂に疲勞と睡眠に堪へられなくなつて、呼鈴を押して黒坊を呼んで寢床をこしらへさせた。

厚い布の帳を引いて、横になつて枕に頭をつけたが、眠らうとするとかへつて眠れなかつた。枕の下に響く車輪の凄じい響が耳についてしかたが無い。

上衣の内がくしに入れてある若かつた頃の母の寫眞を出して枕の下に入れた。自分自身の荒んだ心地を眠ふ心の起れば起る程、今でも母の懐に抱かれた溫かさを忘れかねる自分にとつて、そのかみの母の寫眞よりも心をやはらげてくれるものは無い。

強く強く枕に顔を埋めて、その寫眞のうらに自分が書いた拙い歌を繰返した。

むつかりては母に縋りて泣きし日の
その泣心地忘れかねつも

その母の誰よりも白く、しかもその底にうすく櫻色の血の透いて見える、あつたかい胸に顔を埋めてすゝり泣いた自分の幼かつた姿が明瞭に浮んで來る。父母が旅に出て、祖母と寂しく留守をした時など、たまたま加減が惡くて寢かされてゐても、母が歸つて來てその胸に縋ると、直ぐ心地よくなつた事も思ひ出す。誰よりも誰よりもその頃の自分の目に映つた母は美しかつた。しかしその母も年をとつて、比ぶべくもなく姿のよかつた人が、今では嘘のやうに肥りかへり、何時でも濡れて涼しかつたのが、今では風に當ると涙の出る老いの目になつてしまつた。一人一人子供を生む度に肥つたのだと屢々冗談に言つたけれど……。

それからそれと心を誘はれて行くうちに、いつか自分は心地よく安らかな睡眠に落て行つた。

未だ黎明に目が覺めた。窓かけを揭げて覗くと、何處か走つてゐるのか、曉の光のほの白く

漂ふ平原の低い岡の中腹の靄の中から、無數の羊が草の平に向つて下りて來るのを見た。先頭には一人の牧羊者の少年か鞭を振りながら歩いてゐた。列を離れようとする羊があると、犬が飛んで行つて列の中に追ひ込むのである。

一瞬間、その靜な背景の中に蠢く一群の動物を見たが、それからはたゞ見る限りの原の中に、なだらかに起伏する變化の無い岡を見るばかりになつた。たまたまその岡の上に一軒二軒風車の高く聳える農家の屋根を望む時のなつかしさは、恐らくは異鄕の旅の孤客にのみ味はれる寂しい喜びであらうと思ふ。

寢床の上に横になつたまゝ、窓外の平原に此の日の朝の次第々々に下りて來るのを、夢よりもうつゝよりも、もつととりとめも無く見て過ぎた。

とかくして日輪は原の果ての岡の向うから現れた。

未だ曾て見た事も無く廣く思はれる空を薄紅に染めて、一寸二寸三寸四寸と見る間に高く登つて行く眞紅の日輪は、此の果てしも無い野原の中に活動してゐるたゞ一つの物體であつた。

右も左も海だつた昨日に比べて、かへつて眼界が廣く思はれる大平原のところどころに、丘陵があり、林があり、稀に農家の屋根を遠く眺める時、無器用に耕された畑地をその邊りに見る事もあるけれども、その他はたゞ白茶けた砂原の小部分を埋めて雜草が茂るばかりで、此の大自然の前には人間の存在が極めて微弱に見える荒蓼たる景色であつた。

何處迄行つても何處迄行つても、人間の力の殆んど及んでゐない山野を貫いて走る汽車、殊にその汽車の中に不自由な外國語をはかなみ、顏色の黃色い事、風采のあがらない事を羞ぢなければならない自分は、今は哀れにちつぽけなものに思はれた。

あぢきない此の心地は又、一切の事について自分の手足を縛り、一言一行にも幾度となくかへりみさせるのであつた。他の人がまだ寢てゐるのに起きるのも羞しいし、他の人が皆起きてしまつた後迄、一人寢てゐるのも氣まづいどつちつかずの躊躇が心の底に漂つてゐた。

熟睡の後の腐つたやうな心地よさは、汽車の動搖をもかへつて親しいものに思はせ、特別に何を考へる氣力も無く、うらはかないやうな、かと思ふと、そのうらはかなさが懷しくて震へるや

うな心持で窓外の平野を眺めるよりしかたが無かつた。

そのうちに一重の垂帳の外に足音が聞え出した。誰かゞ話してゐる聲も聞える。誰か起きたに違ひない。そんなら自分も起きたつて羞しくないと考へながら、なほそれを確める迄は安心出來ないで、又暫時愚圖々々してしまつた。

今度は誰かゞ誰かに向つて長々としやべり出した。何か云つては You see? You see? と念を押すのが確實に聞きとれるばかりだけれども、太く濁つた聲が、どうしても昨夜のあのぢゞいに違ひないと思ふと、又起き出る氣が無くなつた。耳をすますと、その濁つた低い聲はしきりに續いてゐたが、ふと途切れると、今度は思ひ切つて大きな聲で、

Yes, sir. All right, sir.

と答へたのは黑坊らしかつた。

そのまゝ二人ともつれ立つて向うに行つてしまつたので、急いで衣服を着て、氣怯れをまぎらす爲にわざと威勢よく垂帳をあけて出た。

大概の人が起き出た後の亂れた寢床が、あからさまに東からさし入る日光に曝されて、何となく、蒸れた人いきれの漂ふのを、あけ放たれたばかりの窓から吹き込む冷い朝の風が窓外に吹き拂つて行く中で、黒坊は忙しく寢具をたゝみ、寢床を元の通りの座席に直して居るのである。

「お早う。よくおやすみになりましたか。」

彼は叮嚀に帽子を取つた。

顏を洗ひ、髭を剃つてから自分の座席に歸らうと、客室の扉をあけると、半分あけた自分の寢床のところに黒坊と老爺が頭を寄せて立つて居た。

何かしら思ひも掛けない事が其處に起つてゐるやうに、些細な事さへ大事に思はれる其時の心狀は、自分をして一歩退かなければならないやうな氣怯れを感じさせた。けれどもそのまま何處に引きかへしていゝかもわからず、又彼等の爲に逃げ出すのも氣がとがめるので、咄嗟の間ではあつたけれども惑亂した心を無理に抑へつけて、平氣を裝つて歩み進んだ。

足音にふりかへつた二人の顏は笑つて居た。それを自分は嘲笑と感じないではゐられなかつた。

近づくと黒坊は例の愛想笑ひをして、

「いゝ御寫眞ですね。」

と云つた。彼の手に自分が枕の下に入れたまゝ忘れた母の寫眞がある。

「そりやあ君の愛人の寫眞かね。」

老爺は卑しい笑ひ方をして、無遠慮に訊ねた。

自分はたゞ赫とした。手きびしいうまい事を云ふ丈英語が自由でなかつた。さうしてその言葉の不自由な事が一層自分を苛々させたので、默つて黒坊の手から寫眞をひつたくつた。

「ハッハッハッハ。」

と二人はいかにもわざとらしい高笑ひをした。

自分は言葉が出なかつた。默つて二人の顏を見詰めて立つてゐたが、思ひかへして、寫眞を內懷におさめ、化粧袋や手拭を其處に投出して直ぐに彼等を後にした。不愉快な室を出ようと扉に手を掛けた時、その扉は外から開かれて、若い娘が入つて來た。昨夜本を讀んでゐた娘だとふ

と思つた時、先方も一寸自分を見てゆき過ぎた。その時又後に二人の男の高笑ひが聞えた。何かなしに癪に障つて、少し狼狽して室を出ると、力任せに扉をしめた。自分の顔は熱かつた。眞赤だつたに違ひない。○

客車と客車の間の人の居ないところに立つて、自分は一層顔がほてるやうだつた。自分の所業の極めて拙劣だつた事を回顧する餘裕が出來た爲、かへつて益々恥入つたのである。

一寸の間其處に如何しようかと考へて居たが、食堂の他に行くところもないので、そのまゝ次の客車の戸をあけた。三四人あちらこちらに居る人が皆物珍しさうに自分を見た。さつさと通り過ぎて又次の客車に入ると、此處にも五六人ゐたのが、又自分の一身に視線を集中した。今度はわざとその人々の顔を一つ一つ順々に見かへしてやつたつもりだつたが、その室を出た時は、誰一人どんな顔つきだつたか覺えてゐなかつた。

やうやくの思ひで食堂に入ると、又しても先客は、たゞ一人のこの日本人に好奇心をそゝられたあからさまの光景を、まざまざと見せつけて自分を減入らせ、同時に興奮させた。

空いてゐる食卓に着いたが、其處らを奔走して居る幾人かの給仕の黒坊は、殆んど滿員の客に忙しくて、なかなか自分のところへやつて來ない。早く來ればいゝと思ふが來ない。目のやり場に困つて窓外を見ると、矢張り變化の無い平原の朝である。何處迄も何處迄もこのまゝ續いてゐて限りの無ささうな波のやうにうねつてゐる岡の背は、あまりに晴れた日の光に霞む程砂が輝いて居る。稀に見る枯草の中の小道が僅かに人の世の遠く無い事を想像させるばかりで、人家も愈々少なくなつた。何となく内懐の母の寫眞を外から抑へて、旅人の心地に沈んだ時、自分の傍に人の氣配がした。給仕かと思つて見上げると、それは彼の老爺だつた。

彼は自分と向きあつて腰かけた。厚ぼつたい鼈甲ぶちの大きな眼鏡の下から自分を見たが、直に食箋を取上げて見始めた。上から順々に讀み下しては又讀みかへす間にも、自分の方をぢろぢろ見る。その大きな鼻の頭の赤いのが、いかにも彼の人格の全部を示すものゝやうに侮蔑に値ひしたのである。

食箋を下に置くと、彼は急に笑顔になつて、

「君はもう注文しましたか。」

と話しかけた。

「イエまだです。なかなか給仕人は來ませんよ。」

自分は相手が厭な奴なので、下手な英語を殊に氣にしながら、彼は給仕人が命を聞きに來るの遲いのを意味したのだと思つたのである。

「では一緒に注文しようぢやないか。何か君の好きなものを。」

自分は彼の顏を見詰めて默した。まだ日本にゐる時に、米國に長くゐた人から、此の國の汽車の旅では一人前の皿の分量は多過ぎるので、見ず識らずの乘合ひ同志が食堂では組合つて注文し、それを二分して喰べると聞いてゐたが、今目のあたり此の老爺から切出された時は一寸返事に困つた。

勿論いやなんだ。しかし何と云つて斷つていゝかわからない。適當な言葉を知らないのだ。それ程英語は不自由なのだ。默つて居てはばつが惡いと思ひながら、默つて居るよりしかたが無か

つた。

老爺は委細構はず、折から側を通つてゆく給仕人の上衣を捕へて呼びつけた。

「サア何にしよう。燔炙肉は嫌ひかね。」

例の通り眼鏡の下から覗いたが、自分はたゞ彼の顏を見てゐる他にどうも出來なかつた。

「燔炙肉。」

老爺は給仕人の方へふりかへつて叫んだ。

「かしこまりました。燔炙肉でございますね。」

黑坊はそのまゝ行きかゝると、

「待て待て、燔炙肉は二人に一人前でいゝよ。それから麪包と珈琲だ。」

彼は自分の方を指さして、二人が組合ひだといふ事を示した。

こんどは食卓の上に半身乘りかゝるやうに、近々と顏を寄せて、いかにも子供を相手にする風で話しかけた。

「英語は話せるかね。」

「イ、エ、全く話せません。」

「そんな事と云つて、それその通り話せるぢやないか。ハッハッハッハ。」

彼は彼自身の機智を喜んで笑つた。その聲があたりを憚からず高かつたので、誰も誰も自分の横顔や背中に視線を集めたらうと思つて、思はず顔が赤くなつた。

「イ、エ、全く話せません？ね、それが英語さ。」

彼は又面白さうに笑つた。笑ふと妙に若々しく見えるのが、胡麻鹽のくせに毒々しい程密生してゐる頭髪と共に、心ある女が見たら淫卑なおやぢと思ふだらうと、ふと想像して僅かに腹いせをした氣であつた、

「君は何をしに亞米利加に來たのかね。」

「僕は學生なんです。」

「學生つていふと、それで此の國で何をしようといふんだね。」

「僕は學生だつて云つたぢやありませんか。學校に入るんですよ。」

自分は彼に子供扱ひにされてゐるのが忌々しかつたばかりでなく、しつつこくからかふやうに問ひ質す態度が癪に障つて來たので、突慳貪な調子で答へた。しかしその突慳貪も、ともすれば相手の言葉が聽き取れず、此方のいふ事も云へないもどかしさから來たものでなくもなかつた。

「學校に、フム、何處の學校に入るのかね。」

「ハアヴァアドです。」

「何、何處だつて。」

「ハアヴァアド。」

「何處。」

「ハアヴァアドですつたら。」

それでも彼にはわからない。自分の發音、殊に日本人の癖としてうつかりするとハアヴァアドをハアバアドとやりさうだから、一生懸命で注意したが、矢張りわからない。わざわざ形に示し

て耳を傾けて來るのがもどかしかつた。亞米利加人のくせに、どうして此のぢゞいは彼の有名な學校をしらないのだらう。

燔炙肉が燒けて來て、大皿のまゝ二人の間に置かれた。老爺はそれを二つに切つて此方の皿にのせてくれた。切口からしたゝる赤い血が、添物の馬鈴薯の白々と湯氣を立てゝゐるのにしみてゆくのを見た。兎角目のやり場に困り勝だつたのだ。

「フム、これはうまい。」

彼は一切を口に入れて、自分の同意を求めるやうに一人言つ。此方も肉刀と肉叉を動かし始めた。

「一體その君の入るといふ學校は何處にあるんだらう。」

老爺は又首をひねつて、考へる樣子をしながら聞き出した。

「それはマサチュセツ州のケムブリッヂにあるんです。」

「ケムブリッヂに、さうするとあのハアヴァアド大學のある近所かしら」

「そのハアバアド大學に入るんです。」

「大學に。」

彼は肉を切る手を止めて、けゞんさうに自分を見守つた。

自分は初めて彼の飲み込みの遲い理由がわかつた。彼は自分を東洋の未開の國から來た一少年として見くびり切つてゐるので、大學に入る學生だとは考へる事も出來なかつた爲、ハアヴァアドの名を聞いても解せなかつたのに違ひない。

「だが君は大學に入れると思つてゐるのかい。」

「入れるんです。私は今年日本の大學を卒業したんですから。」

「日本の大學を卒業したつて。」

又今更にしげじげと自分の顏を見守つた。その口邊に寄る皺が深くなると、どうしても嘲笑のしるしだとしか思はれないで厭な氣持がする。

そのまゝ一寸言葉を切つて、最後の肉の一片を片付けたが、今度は麪包のちぎつたやつに皿の

中に残つた汁をしたしては口にはこび、しまひには麭包で皿中を拭いて、そいつも口に入れてしまつた。それが濟むと、今はこばれた珈琲に角砂糖を三つ四つ入れ、丹念に匙でかき廻しかき廻しかき廻した後で、少し暑いのを口を尖がらして吹いて、そこで初めて一口飲んだ。

「一體君は幾歳だね。」

老爺は改めて此方の顔をのぞき込んだ。

「そんな事を訊ねる必要はないでせう。」

自分は彼の無禮な態度が癪に障つて、冷々と答へて彼を見かへした。

「フム。」

視線もそらさずに二人は默つて睨み合つた。一秒二秒三秒、僅かに一分ともたゝないのが、おそろしく長時間に思はれた。

「給仕ッ。勘定ッ。」

老爺は突然大きな聲で黒坊を呼んでから、又忠叮嚀に勘定書を調べ、一つ一つ臺口からつまみ

出した銀貨で支拂ひを濟ますと、挨拶もしずに立つて行つてしまつた。

自分は悪く度胸が据つてしまつた。土地には馴れず言葉は出來ず、人種がちがふ上に、それが此國では常に侮蔑の對照となつてゐるヂャップとして、一から十迄びく〳〵してゐたのが、彼の老爺の見くびり切つた押付けがましい態度に對抗する爲に、自然とたかぶつて來た感情は、自分の怯懦を追拂つて、敵愾心に伴ふ心強さを與へてくれた。

此方も勘定をして自分の座席に歸ると、老爺は又昨夜の通り、讀んでゐるのか居ないのかわからない態度で新聞をひろげてゐる。自分の方をそのかけからちらと見たが、又新聞に目を落した。

向うの隅の娘は、窓をしめ切ると、蒸れるやうな室内の蒸氣暖爐に外套を脱いで、海軍紺の上衣の襟に思ひ切つて大幅の白いレエスをつけたのが初々しく、帽子も脱いで、明色のあまり澤山に無い髪を無雜作に結つたちいさな頭を窓にもたせかけて、これも昨夜の讀みつゞきであらう赤い表紙の本を目の高さ迄捧げて讀んでゐる。

あちこちの他の乘客も、何れも氣の無ささうな、だらけた身體をもてあつかつたやうな風で、

大概は窓の方によりかゝつて新聞か雜誌を讀んでゐた。

自分も所在なさに、手さげの中の本を取出して讀み始めた。

誰もたゞ徒然の氣まぐれに本を開いたに過ぎないので、自分も落ちつかなかつたけれど、他の人々も落ちつかないと見えて、長く讀書して居る者はなかつた。立上つて室外を前方に出て行くのは列車の一番前の喫煙室へ行くのであらう。後方に赴くのは最後に連結された圖書室を志すのに違ひない。他の室から來て此室を抜けて行く者も頻繁になつた。長旅の徒然に惱み始めたと同時に、此の汽車に馴染んで、狹い列車の中を心置き無く歩き廻るやうになつたのだ。

いくら讀んでも、意味を取る事さへ出來ない程氣乘りのしない本を腰かけの上に殘して、自分も圖書室へ行つて見た。いくつあつたか知らないが、通り抜け通り抜けした客車は無闇に數多く思はれたが、それは眞に客車の數が多かつたのではなくて、見馴れない日本人の姿の物珍しさが、人々の旅の無聊に鈍り勝な心を刺戟して、ゐたゝまれない程の注視を一身に浴びせかけられた爲であつた。

圖書室には五七人あちこちに散つて、新聞雜誌を讀んでゐた。彼の老爺も若い娘も他の一人の年とつた婦人と、もう一人の若い男と四人一かたまりになつて、風景寫眞帖を見ながら話し合つてゐた。

自分の姿を見ると、老爺は待ち構へてゞもゐたやうに手をあげて招いた。

面ぶせながら近寄ると、老爺は娘の膝の上の寫眞帖を取上げて彼自身の膝の上に載せ、幾枚かあれこれとはぐつて見たあげくに、日本の富士の景色を指差して自分の方をかへりみた。彼は何も云はないで、さも大きな發見をしたやうな得意さで、しつつこくその平凡に秀麗な寫眞を指差して見せると、他の者は一齊に自分を見上げて、此方の爲る樣を見守るのである。

「ア、、富士山ですね。」

自分は詮方なく聲を出した。

「綺麗ぢやないか。この通りかね、この山は。」

「エ、その通りです。」

「マア此處におかけなさい。」

ともう一人の若い男は其時傍の空席を輕く叩いて促すので、自分も退屈しのぎに仲間に入つた。

「この少年は學生で、ハアヴァアドに入學するのださうですよ。」

老爺は主として二人の女にむかつて、こんな子供が大學になんか入れるものかと云つた調子で可笑しさうにしやべつて高笑ひした。彼は自分を呼んで 'This boy' と云つた程、子供だと一人きめにきめてゐるのであつた。

「ハアヴァアドに?」

年とつて非道く肥滿した人の善さゝうな老婦人は、これがその人の聲かと思ふ程若々しい透通つた聲で訊いた。この人も亦自分の柄を見て大學に入る年齢ではない、何か思ひちがひをしてゐるのだらうと云ふ樣子をありありと示すので、自分は進んで說明してやる氣になつた。

「私は日本の大學を卒業して來たので、無試驗で入學出來るのです。日常會話の英語は此の通り出來ないけれど、講義を聽けば少しは解るだらうと思ひます。一體日本人はちいさいものですか

ら貴方がたは私を子供だと思つてゐるんでせう。」

下手な英語の滑には簡單な事さへ言へないのを氣にしながら、冗談めかしてそれとなく自分が大人である事を知らせてやらうと思ふ丈の落つきはあつたのである。

しかし先方は自分を子供だと思つてゐたのが、意外にも對等の口をきいて、こんな事を云つたので、一寸二の句がつけなかつたのであらう。默して自分を見守つた。

「失禮ですが、何の學問を研究なさるんです。」

若い娘は少し鼻のつまつたやうな聲で、しかし人なつつこい調子で訊ねた。

「社會學をやり度いと思ひます。」

答へながら、初めて正面から娘の顏を見た。小ぢんまりした目鼻の、殊にちいさな口の脣の色の思ひ切つて赤い他は、いかにも控へ目な寂しい顏立ちで、遠くから見ると全く人目をひかないたちであつたが、近くで見るとまだいたいけな幼子の無邪氣な美しさを失はない可憐な顏である。そのくせ年頃の女に特有な肉の豐饒や色つぽさを少しも持つてゐない人であつた。

「社會學つていふのはどんな學問です。」

老婦人は老爺にむかつて訊ねた。

「サアどんな學問ですか、兎に角新しい學問ですよ。社會學つてのはなんだね。」

彼は自分の方に顔をむけた。

「社會學とは……。」

自分はさう云ひ出しながら後が續かなかつた。なんと云つていゝかほんとに其時は些かの見當もつかなかつた。英語を話す事丈に自分の頭腦の全部が支配されて、他の事は一切考へる事さへ出來ない有樣だつた。

「社會學とは……社會學とは……。」

自分は今度は英語が不自由なので、うまく云へないやうな樣子をつくろつたが、その實頭が空虛だつたのである。みんなが自分を見てゐるので愈々困つて顔が赤くなつた。

「社會學とは社會を科學的に研究する學問です。」

兎に角ひとつの言葉を首尾全く云ひ終へてホットしたが、いかにも智惠のない空漠とした答へだつたと即座に思ひかへすと、羞しくてゐたたまれない心地がした。

みんなが腑に落ちない顔をして自分を見詰めて沈默を續けてゐるので、これは失敗つたと後悔した時、

「ハッハッハッハッハッ。」

と老爺は突然、さも可笑しさに堪へないといつた風で高らかに笑ひ出した。

向うの方で新聞を讀んでゐた者の目も此方に向いた。二人の女も若い男もあまりに突然な老爺の哄笑に、どうしていゝか困つた樣子で、しかも老爺と自分を見守つてゐる。

「ハッハッ。ハッハッ。」

と咳をするやうに最後の笑ひがかすれて止むと、一座は白けてひつそりした。

みんなが口をきく適當な機會を待ちながら、まづい事も云ひ出せないさつぱりしない心持を抱いて、互に手持無沙汰の顔を見合つてゐた。

老爺はまだ笑ひ足りないのを無理に堪へてゐるのだと云ひたげに、口の邊に下等な微笑を漂はせて自分を見、又女達を見廻した。この顏色の黃色い一人を、彼は女達の座興に供したいのだと自分には邪推された。

もう一人の若い男は、人のよささうな間延びのした顏を、何方の方角に向けていいかわからないで困つてゐるのをまぎらす爲に、腹のしつかりしない人間に特有な無意味な習慣性の愛想笑ひを浮べながら、膝と膝の間で揉手をしてゐる。

老婦人は老婦人で、肥れる丈肥つたのが、寄る年にたるみの來た顏をあけては自分を見、自分を見ては濟まないと思ひ返してうつむき、兎角して年にしては白過る手の指の大きな石の入つた指輪に視線を落してしまつた。

娘は自分の眞向きに坐つて居るので、一層困つた顏を窓外にそらして、變化の無い平原の目標の無い一點を無理に凝視してゐる。年頃の娘らしくなく、子供子供した細い頸筋がいかにも脆弱に見えるのに、白過る程明るい髮のおくれ毛が、凡そこれ程細い髮の毛があるのかと思はれる細さ

で少し亂れかかつてゐる。横向きになると痩せてはゐても女らしく、少し下ぶくれの頰の、光を浴びたうす皮の下の血が透いて見え、空色の眼と櫻ん坊のやうな脣の色とともに、思ひもかけぬ清浮な少女の美しさを見せた。その皮のうすさうな頰つぺたに淺い切傷のあとの殘つてゐるのが、ふと自分の心を引いた。

自分自身は間も無く度胸を据ゑて落ちついてしまつて、手持無沙汰の人々を冷嘲してやり度い優越した氣持が反抗の後に湧いて來た。さうしてこの目の前の人々に一人一人想像の色彩をつけて、とつさの間に彼等の性格から日常生活の有樣に迄考へ及んだが、殊に娘の横顏の美しさを發見した時は、自分は全く平靜に復して、かへつて此の自分及び自分の生れた國を全く理解しない人々の間にゐる一日本人を客觀化して眺める餘裕さへ生じたのである。

まだ六歲か七歲の頃であつた。遊び友達の兄妹と庭のうら藪の日當りで、飯事をして遊んでゐた時、どうしたはずみか自分が手にしてゐた竹の切れはしで友だちの妹の頰に怪我をさせた。幼い女の子は火のつくやうに泣き出し、傷口からは夥しい血がしたたり落ちて衣服を染めた。自分

もそれを見て泣き出した。女中が聲を聞いて馳けつけ、母もはだしでかけて來た。女の子も自分も大人の姿を見ると安心して、又一段聲を張り上げて泣いた。

その人の傷は一生殘るものとして二人の子の母になつた今も消えない。初めのうちは赤く一筋目について、自分はその人を見、その人の母親にあふ時は馳け出したい氣持に追はれたが、段々ちいさくうすくなり、年頃になつて目立つて肉づきがふくよかになると、それは靨のやうな一點になつて、笑ふ度に目につくのがかへつて可愛らしく、自分はその傷痕の爲にその人をなつかしく思つたのであつた。

その人と殆んど同じ場所で、横を向かないと一寸氣のつかない位のうす傷を、ふとこの亞米利加の娘の頰に見出して、昔から知つてゐた人のなつかしさを強く覺えたのである。

「アラ、羊、羊、あんなに澤山羊が。」

娘は突然活々した聲で云つて、窓外を指さしながらふりかへつた。

座白けに困じ果ててゐたものは一齊に立上つて窓際に寄つた。その人々の肩越しに覗くと、今

過ぎて行く平原の低い岡を灰色の羊の群が上つて行く。その後から馬に乘つた少年が鞭を鳴らしながら追つて行くのである。大風の日には見る間に形をかへてしまひさうな砂の岡の、道も無い斜面を獸は溫順に列を亂さず上つて行き、その岡の頂から恐らくは淺い谷にでもなつてゐるのであらう、三足四足五足六足宛上り切つたと思ふと、直ぐ山かげに下りて見えなくなつてしまふ。最後に馬の背の少年の姿がその岡の上に、一瞬間、青空を背景にして影繪のやうに見えたが、鞭をふりあげた手をふり上げたまま、砂の中に埋もれてしまつたやうに岡の向うに消えてしまつた。

「ああ、みんな行つてしまつた。」

娘は嘆息するやうにつぶやいて、腰を下した。

「なんてたいくつな旅なんだらう。」

老婦人は娘の言葉に答へるのでもなく一人言ちつつ、最後に窓を離れると、輕くみんなに挨拶して、重いからだを左右に搖りながら歩き出した。それと見ると老爺も立上つて、介添人の姿で後について一緒に室外に出て行つた。

若い男は娘の側で又寫眞帖を開いて雜談を始めたが、自分はそのまま窓際に殘つて、今の今羊の群が視界を去つてから、又以前の單調に動かない平原をぼんやり眺めてゐた。何處にも人里らしいものは見えないが、彼の牧羊者の少年の家は何處にあるのだらう。山の向うの、又これよりも廣い平原の中にあるのだらうか、あの山の向うには存外樹木の茂つた村里があるのだらうか、どうも見渡す限りこのままの沙漠とも呼び度い荒野だとしか思はれない。やがて自分の空想はさまよへる牧羊者と羊の群の夕暮に縋るべき石もなく行きくれる景色さへ描き出した。

「何をぼつてゐらつしやるの。」

ふりかへると、若い男の姿は何時の間にか見えなくなつて、娘は自分の隣に來て並んで掛けて窓外を見た。

「天と地、それつきり何もないんですねえ。」

「エエ、だけど先刻の牧羊者の子供なんか何處に住んでゐるんでせう。」

娘は日本人と口をきくのが珍しさうに、たどたどしく英語を語る自分を見守る時、その幼な氣

な顏の筋肉は、好奇心の爲に緊張してゐるのであつた。

「さうですねえ、何處に住んでゐるんでせう。」

娘は小首を傾けて考へて、

「隨分寂しいでせうねえ。」

と云つてその寂しさを想像するやうに心持眉をひそめた。この人のちいさな、面積の狹い顏が極めて自然に表情に富んでゐるのに驚いた。正面から見る時と横顏とが全く違ふ感じを與へるばかりでなく、その時々の話に心持の誘はれるまま細かく動く表情が、自分をして絕えず盜み見させる誘ひとなつたが、しかも持前の子供らしい無邪氣さを失はないのが一層可憐に思はれた。

「貴方はかういふ處に一生住んでゐられますか。」

「イイエ、とても駄目です。貴方は。」

「私、私も駄目。私は大變旅行好きなんですけれど、旅に出て二三日すると又直ぐ家へ歸りたくなるんです。今度も半年位は加奈陀にゐるつもりで行きましたけれど、直ぐ又うちが戀しくなつ

て、やつとの思ひで二ケ月辛棒しました。とうとう辛棒しきれなくなつてしまつて。」

娘は面白さうに笑つた。頬の切傷が靨のやうに愛くるしいのを見た時、自分はあまりよく似てゐるのに驚いてその顔を見詰めた。

「加奈陀に行つたんですか。」

「エエ、兄がゐるものですから遊びに行つたんです。ヴイクトリアね、彼處ですよ。」

自分の想像は娘の頬の傷に集められてゐた。矢張り幼い時自分が遊び友たちに於けると同じ出來事の爲にうけたのではないだらうかと考へると、又しても自分はこの人とも子供の時分に遊んだ事があつたやうな氣がして來る。

「私はほんとに世界中旅行して見たいんですよ。歐羅巴には兩親につれられて行きましたが、いつか一度は印度支那殊に貴方のお國の方へ行つて見度いと思ひます。」

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。きれいでせうね。なんて云ふんです。櫻ですか、あの撫子色の花が咲いてゐて。」

娘は遠くに憬れる樣子で想像の日本を目の前に描かうとしてゐる。

「だつて櫻は年中咲いてはゐませんよ。貴方がたは日本でいふと、それこそ春夏秋冬花が咲き亂れてゐて、蝶々が飛んでゐて。」

「さうしてムスメが扇子を持つてダンスをしてゐるんでせう。」

自分はしやべつてゐる中に言葉の不自由に攻められて、どうしても淀み勝になつて來るので、娘は引取つて、からかつて快活に笑つた。

「エエ、それなんです。貴方がたの想像する日本は。」

「けれど私の叔父で昔船長をしてゐたのがよく話しました。それはそれはきれいな國ですつて。瑞西よりももつときれいですつて。」

「瑞西は知りませんが、成程山水のきれいな國にはちがひありません。しかしそれだつて貴方が浮世絵や蝶子夫人の舞臺で見て想像するやうなものではありませんよ。殊に市街の體裁、家屋道路

の不潔狹隘な事、人間の醜惡な事なんかが第一に目について、いやになるだらうと思ひます。」

「そんな事があるもんですか。」

娘は自分が自分自身を醜惡な人間の一人として數へてゐるのに驚いて、目を見張つた。

「ほんとなんです。おまけに亞米利加の新聞や雜誌でよく書きたてるやうに、日本人は邪推深く嫉妬深く、全く不正直なんです。」

自分は一體自分自身の事、自内の事友だちの事、なんでもかんでも些かの惡意なく客觀的に批評し得る性質であるが、此の時は少しは語氣も強く、娘の驚くのを面白がつてゐる傾向もあつた、

「そんな事があるもんですか。日本人は大變正直で親切だつていふぢやありませんか。それに亞米利加人のやうに粗野ではないんでせう。」

娘は云ひ得て嬉しいといつた風で、これも亞米利加人である自分達を粗野だと云つて得意氣に笑つて、さうしてわざと濟ました顔をした。

「誰がそんな事を云ひました。」

「私の叔父がよく話をするんです。それからハアンも書いてゐるぢやありませんか。」

「誰ですつて。」

「ラフカディオ・ハアン。御存じでせう。」

「知つてますとも。私はあの人のものが好きで、よく讀みました。」

「アラ、貴方がた日本の方にも面白いんですか。矢張り文章がいいから面白いといふ意味なんですか。」

「イイエ、そればかりぢやありません。」

「だつてあれは小説ではなし、日本の事を吾々外國人に紹介する爲に書いたやうなものぢやありませんか。」

「それはさうですが、ハアンの書いたものを見ると、日本を特にいい國として感じようとする西洋人、しかもその人は生れつき詩人で、自分自身を置くべき環境を無理にもいいものにしてあくがれ度い心持と、時には眞實その主觀的努力の中に身を沒してしまつて、持前の詩人がうたは

ないではゐられなくなつたところが面白いと思ふのです。」

自分は言葉の配列を度々考へては直し考へては直して、どうかして自分の考へを傳へたいとあせつたが、あまり言葉が堅苦しくなつてしまつたので、ゆき詰つてしまつた。

「つまりハアンの書いたものは日本人の見る日本でもなく、さうかと云つて一般西洋人の見る日本でもなく、矢張りハアンの見、或はハアンが創作した日本なんです。だからハアンの傳記を知つて讀むと一雇面白さがまして來ます。」

どうしてかうも會話にさしつかへるのだらうと羞ぢながら、矢張りぎごちない言葉しか使へなかつた。

「貴方は話は出來ない出來ないと云ひながら、隨分英語の言葉を知つてるぢやありませんか。」

娘は自分の下手な發音を聽き取るのに努力しながら、それでもどうかかうか意味あひはわかつたと見えて、笑つてうなづいた。

「貴方は Big words ばかりお使ひになるんですねえ。」

「エエ、それは耳から覺えた英語でなくて、目から學んだ英語ですから。」

自分は初めて亞米利加の娘と話をして、その遠慮の無いいやみのない態度が氣持がよかつた。誰でもこんなに氣が置けないのか、又は此の人は特別なのかわからなかつたけれど、兎に角日本にゐた時の經驗では、他所の娘といふものは男と向きあつて話をしてゐると、妙に固くなりながら同時に嬌姿をつくつてゐるのが小憎らしいものであつた。なんでも男といふものは自分達を口説くものだと考へてゐるやうなのが友だちづきあひを妨げる原因なのである。さう思つて目の前の人を見ると、些かも邪念の無い此の人特有の子供らしい顔つきが、眞正面から自分を見てゐたので目を見合せて笑つた。

その時室内に黑ん坊の給仕人が入つて來て、大きな聲で食事の用意の出來た事を告げて廻つた。

「やつとおひるになりました。貴方はまだ食事にはゐらつしやらないんですか。」

「私はまだお腹がへらないから後にしましよう。」

「私は先刻の年とつた奥さんと約束しましたから。それでは左樣なら。」

娘は立上つて二三歩行きかけたが、ふりかへつて、

「初めて日本の方とお話をして大層面白かつたんですよ。また後程日本に就いて愚かな質問をしますからね。」

笑ひながら娘は足早に出て行く。立上ると背が高く、脚が長いので、お尻の位置が少し高過るやうな後姿は直に戸口から消えてしまつた。

あたりに誰もゐなくなつた。みんな食堂に行つてしまつたにちがひないと思ふと、自分も食事をしなくては外聞が悪いとも思ふが、事實お腹は空いてゐなかつた。その上又あのぢゞいに押しつけがましく食事を共にして、組合で食べる要求でもされては堪らないと考へると、一層食慾は無くなつて、自分はそのまま其處に積んである雜誌を見たり、窓外の景色を眺めたりして過してしまつた。

食後第一に圖書室に這入つて來たのは、先刻其處の一隅で新聞を讀んでゐた男である。赤ら顔の大男で、自分を見ると笑顔になつて、つかつか寄つて來た。

「たいくつでせう。」

彼は咽喉の惡い人の聲で挨拶して、自分の前に掛けた。恐ろしく毛もくぢやらな、いかつい手の指に指環の光るのを膝頭で組合せて、椅子の背に寄りかかりながら話し始めた。何處に行くのか何しに行くのかと、きまりきつた問答が濟むと、

「私は今度日本に行つて來たんです。」

とその男は得意さうに見えた。

「日本に。何しに行つたんです。」

「玩具を仕入れに行きました。私は市俄古の大きなデパアトメント・ストアの東洋部に勤めてゐるのですが、毎年日本に行く友だちが病氣で行かれなくなつたので、急に私が出かける事になつたのでした。エエ、耶蘇降誕祭の仕入れです。」

彼は二ケ月滯在した間の日本の印象を、商店の手代らしい淺薄さで語り出したが、聲の低いのと立てつづけにしやべるので、自分には聽き取れない事が多かつた。

間も無く先刻の間延びのした顔の所有者なる若者や、他の二三人の男が此の室に入つて來ると、彼は急に元氣づいて、彼等とは十年の知己だつたやうな親しさを示しながら、みんなを聽衆に引き入れてしまつた。

彼は秀麗なる日本の風景、富士、日光、箱根、鎌倉、その他見廻つた名所の名をあげて、最上級の形容詞をつけて話した。しかしその各地の景色を彷彿させる特徴とか、その土地の歴史とか、地理とかいふものについては一切知らなかつた。ただ無闇にほめたてた。Most beautiful, most wonderful とか、biggest, largest, finest, loveliest といふやうな言葉がのべつに出て來てその後には又必ずin the world といふ滑稽な響を持つ言葉が續いた。さうして更に自分をして彼が語る事は眞實であると承認させなくては納まらなかつた。淺薄ながら雄辯であつた。低い聲も段々に力を持つて來て、彼を驚かした未知の世界の奇異なる風俗習慣は、明媚なる山水よりも遙かに面白い話材であつた。

木と紙でつくられた扁平な家屋、人間を乘せて人間のひく人力車、轉ばなければならない筈の

下駄をはいても轉ばない人間の事、何もはさめない筈でゐて、しかも實際豆でもマカロニでも二本の棒で食べる人間の事、それからそれと人々をして感嘆して目を見張らせた。

「吉原を見ましたか。」

突然聽衆の一人は、少しもあたりを憚からない聲で訊ねた。

「Why, of course」

彼は一層得意さうに答へて、みんなを見廻した。

「吉原とはなんです。」

何もしらないのが眞面目にきいた。

「夜の世界ですよ。」

「夜の世界です。政府の經營してゐるホワイト●スレエヴです。」

語り手は他の者の聲を押しのけて說明した。

「ほんとですか。政府でやつてゐるんですか。」

「私は見て來たんです。ねエ君、ほんとですねえ。」

彼は自分の方に同意を求めた。

「それはほんとではありません。政府は……」

「イイエ、それはほんとです。」

自分が、政府が商賣をしてゐるのではなくて、政府はただ公許してゐるのだと云はうとするのを、彼は非常なる自信をもつて打消してしまつた。

「それは全く籠の鳥です。晝間でも戸外に出る事は許されてゐません。役人がついてゐて、一歩たりとも家の外には出しません。」

彼の調子では、ほんとにさう信じてゐるらしかつた。

「ハッハッハッハッハ。」

老爺の下卑た高笑ひが突然人々の後から聞えた。

「役人がついてゐて、ハッハッ、いい考へだ。ハッハッハッハッ。」

何時の間に來てゐたのか、人々の間に立つてゐた彼は、今は堪へても堪へても堪へきれないといつた風で、ひき息になつて笑つて笑ひ止まなかつた。

一座の者はすべて、此の無作法に笑ふ老爺よりも、寧ろその笑ひの標的であつたかの如き不見目な位置に置かれた自分を、四方八方からもの珍しさうに注視してゐる。

どうともなれと思つて、自分は正面を切つて端座してゐた。これらの下等な人間の面白づくに自分を見てゐる幅の廣い面を、此方からも順々に見廻してやつた。

「ハッハッ。ハッハッ。」

老爺の笑ひはまだ止まなかつたが、その笑ひを打消すやうに若い女の聲が人々をかきわけて、かの娘の無邪氣な顏がこの室内に現れた。

「なんです、何か面白い事があるんですか。」

「イイエ、今此の人が日本の珍しい風俗を紹介したんです。」

間延びのした男が側から差出て、女にはきかせ度ない話を祕しかくす爲の習慣的の謊をついて、

自分の開かうとする口を封じてしまつた。

「マア、此の方は日本を見てゐらつしやつたんですか。」

娘は空色の目を大きくして、話上手を見上げた。

「エエ、私は日本を見て來たんです。商用で行つたんですが。」

男は相手が女なので、一層得意になつてしやべり出した。

「マア羨ましい。どんなでせう、日本は。きれいでせうねえ。」

娘は何も疑ふ事なく、その憧れやすい心から、膝を乗出して話を求める。

「ねえ、此の方の日本觀もラフカディオ・ハアンのと同じ部類に屬するのですか。」

娘は輕い樂屋落を喜んで、少しは此方をからかひ氣味にかへりみて云つた。

自分はそのへだてのない態度が嬉しかつたが、同時に此處に多大の侮蔑に値ひする人間の顏の並んでゐる事が、娘と二人きりで愉快にもの語る事を妨げるのだと思ふ口惜しさを感じた。先刻からの反抗心に、自分の優越を娘の前で示し度い淺薄な芝居氣もまじつてゐた。

「さうですねえ、兩方とも日本を自分に都合のいいやうに理想化した點に於て一致してゐませう。しかし彼は日本を詩化し、これは日本を俗化した丈が違ひます。」

云ひ切つてから、氣障な事を云つたなと自分で反省したが、わざと平氣な顏をして一座を見た。

みんなが驚いて自分を見た。憎惡の色が、異人種の意識と共に、極めて鮮明に彼等の顏面に浮んだ。

睨み合とも云ふべき暫時の間の沈默の後に、一座は段々に崩れて散つて、やがて多くの人は室外に立去つたが、彼の老爺は意地の惡い微笑を浮べながら近寄つて來た。

「もうぢき停車場に著きますよ。」

云ひながらぴつたりと娘に寄添つて座つた。その淫靡な下劣な顏つきを見ると、自分はそこにゐたたまれなくなつた。默つて娘に一禮して立上つて、さうしてそのまま室外に歩み去つた。

自分の席に歸つて落ちつくと、又窓外の荒野の景色を眺める他に爲方が無かつた。本を讀んでも根氣が續かない。三十一字の歌でも作らうと思つても、考が纏まらない。いくつもいくつも切

れ切れの文句を書いては消し、書いては消す手帖の幾頁は眞黑になつてしまつた。

白雲は浮びて高し久方の
天津御空もわが知らぬ國

といふ一首を二三度口吟んで、その簡單な平凡な表現の底に漂ふ、その時の自分の心持の淡い果敢なさをなつかしんだ。

けれどもそれも少したつと、高しと云つた直ぐ後に久方と續くのは、同じ事を繰返して居るやうに思はれて來た。そんな事は無い、高し久方と續けてこそ力强く心持を云ひあらはす事が出來るのだと、他の考が續いて起つて來る。どつちが正しいのか自分では全く解らなくなつてしまつた。

ああ晝寢をし度いとつくづく思つた。晝寢をした事の無い自分には、此の時晝寢程羨しいものは無かつた。手帖をしまつて目を閉ぢたが、眠れない。意地になつて目をつぶつて居ると、益々眠くなくなるのである。それでも矢張り目をつぶつて居た。目をあいてぼんやりして居ると、乘

合ひの誰かに話しかけられさうで、それが嫌だつたのだ。

近々と人の足音がするのに誘はれて、うす目をあくと、あの間のびのした顏の男と、もう一人別の男が、側を通り過ぎて、次の客車の方へ行くのであつた。

「もう直き停車場に着きますよ。」

一人は自分の方をふりかへつて、言ひ殘して行つた。

停車場の近くだと聞いても、窓外の景色は變らなかつた。窓から首を出して行手を見ても、矢張り同じ平原に過ぎなかつた。

十數分の後汽車は荒寥たる草原の孤驛に着いた。こんな人家も無いところに、如何して停車場があるのだらうと、心配になるやうな處であつた。

人々は爭つて下車して、其處いらを散歩した。自分もみんなの後から降りて、草を踏んで歩いた。砂ほこりの多い荒地に生えた草の中にも秋の花が咲いてゐた。名も知らない雜草の白い花と、野菊に似た薄紫の花が風に吹かれてゐるのを、哀れと云ひ度い心持で見詰めてゐると、佇む足

の下で蟲の音がかすかに聞えた。咽喉のかれたやうな細々とした聲で啼いてゐる。

「何を見てゐらつしやるの。」

うしろから聲をかけたのはかの娘で、肥つた老婦人と手を組んで歩いて來たのが、自分の側に立止つた。

「蟲が啼いてゐるんです。草の中で、」

娘は上半身をもつたいらしく屈めて、子供らしい顏を横にして、草の穗にすれ〳〵に耳を傾けた。

「ね、啼いてるでせう。何の蟲でせう。」

「エエ、啼いてます、啼いてます。蟋蟀でせう。日本にはゐないんですか。」

「蟋蟀ですか。若しこれが蟋蟀なら、日本の蟋蟀の方がずつとい〻聲です。」

「マア此の人のお國自慢たら。」

老婦人はからだをゆすり上げて笑つた。

發車の時間が近づいたらしく、あちこちに散つてゐたのが又乘込むので、三人は自分達の客車の方へ歩いて行つた。すると停車場の中に一かたまりになつてゐたのが、何か大きな聲で罵るやうに云ひかはしながら、引上げて來るのにぶつかつた。その一群の中から一人の男が馳け出して來て、二婦人に向つて叫んだ。

「ルウズベルトが擊たれたさうです。短銃で。」

彼は自分自身が現場から馳けつけて來たやうな驚愕の表情をして云つた。見張つた目はまた〻かず、息せはしく云ふのであつた。

「なんですつて、ルウズベルトが殺されたんですか。」

娘もせき込んできいた。

「イ、エ、死にはしません。今新聞で見たんです。ミルウオキイで擊たれたのです。」

男は汽車の出るのを忘れてゐる女達を促して乘車させた。あつちでもこつちでも、幾組かの人のかたまりが、此の椿事を中心にしてさかんに論じはじめた。

大統領の候補者として立つたルウズベルトがミルウオキイで演說會場へ行く途中、兇漢の爲めに短銃で狙撃されたといふのである。内がくしに入れてあつた演說の草稿の爲めに銃丸は深く貫通しないで、彼は一命を取止めたといふのである。

動き出した汽車は又全速力で、此の平調を破つた意外の報道を傳へた一小驛を忽ち後に殘してしまつた。誰が其處に降り、誰が其處で乘つたか、殆んど目にもつかない程寂しく停車場は取殘された。

すべての人が、ルウズベルトの事件の爲めに興奮して、聲を高くして語り合つた。簡單な新聞の記事は充分眞相を傳へなかつたか、それだけ人々に想像の餘地を殘して、話題を多くした傾があつた。

擊たれた彼は自黨の人々の止めるのもきかず、胸部の負傷に惱みながら、なほ吾に演說せしめよ、然らずんば死を與へよ、と叫んだといふ。人々は此の古典劇のせりふのやうな一句を、口から口に傳へて繰返した。或者は此の事件が、この度の選擧に及ぼす影響を論じて、殆んど自分が

演說をしてゐるやうに調子を張り、身振り手ぶりで話した。すると又一方には、それに反對の說を述べる有志もあつて、思はぬ議論の花を咲かせる一團もある。かと思ふと、自分はルウズベルトの知己でもあるやうに、彼の生ひ立ちからその閱歷性行迄詳細に語り出す男もある。引いてはその反對黨のウイルソンを論じ、又タフトを論じて、共和黨も民主黨も互にしやべり度い丈けしやべるのであつた、彼等は反對黨であると否とを問はず、自分達がこれらの偉人を所有してゐる事に滿足してゐるらしく見える。日本人が皇帝に對して持つてゐる尊敬は、彼等には解し難い心持であるに違ひない。しかし彼等が彼等の大統領に對して持つてゐる情愛も亦日本人にはわからない。吾々は皇帝の臣民であつて、皇帝の存在あつて初めて吾々も存在してゐるのに、彼等の大統領は彼等の存在の爲めに存在してゐるのである。今この汽車の中で論じ合つてゐる男達の口から出る言葉を聞いても、日本の役人は震感されるに違ひ無い。

「ルウズベルトはほんとに nice chap だ。」

一人の若い男は滔々と政治論を吐いては、合間々々にかう云つて、一人で滿足さうに一座を見

廻した。

今亞米利加の大平原を走つてゐるこの汽車の中には、ルウズベルトの名がかまびすしく響きわたつた。機關車の中はいざしらず、列車の頭から尻尾迄、乘合ひの米人はもとより、歐羅巴人も猶太人も黒坊も、男も女もすべてルウズベルトと、ルウズベルトを主人公とした戯曲的の出來事に刺戟され、興奮して居た。その出來事を中心とした群衆心理が、他のあらゆる感情を包含し、融合してしまつた。恐らくは此の時、この光景を旅人のもの珍しい心地で眺めてゐたのは、たつた一人の日本人、自分だつたに違ひない。

汽車は只管走つた。傾いた日に赤く輝いた平原は、何處迄も何處迄も續いたが、最後に日輪は卵の黄味のやうにどんよりと濁つて、遠くの地平線に沈んで行つた。薄明の漂ふ見る限りの荒地に、夜は重たくのしかゝつて來て、風が出て、月が出た。

その宵月の青い光がうす霧に濡れてしめつぽくなつた時、汽車は又野中の一小驛に着いた。しやべり疲れた人々は又爭つて下車して、子供のやうに輕い足取りで歩き廻つた。或者は停車

場の中に駈け込んで、酒場に立つて珈琲をすゝり、或者は夜食の爲にサンドウイッチを買込んだりして居る。

自分は一人改札口の傍の灌木の茂みの下草の中に立つて、寂寞の影のやうな自分をいとしがる心持をなつかしんだ。此處らあたりは目にも立たない位ではあるが、少しは傾斜面になつてゐて、遠く近く暗い木立も見える。荷物を持つて五六人の人が下りて改札口から出て行くのと擦れ違ひに、同じ程の人數は乘車したやうだつた。こんな人里遠い土地の何處に此の人々は住居してゐるのかと、停車場を離れてゆく馬車の行衛を見送つてゐると、今その馬車迄荷物を運んで行つたのだらう、小柄な赤帽が馳足で歸つて來たが、自分を見ると、つか〳〵寄つて來て、帽子を取つた。

「貴方は日本の方でせう。」

彼は明晰な日本語で云つた。

「汽車が着く度に、若しや日本の人が乘つてやしないかと思つて、列車給士に聞くのです。先刻も一人ゐるといふので、客の荷物を運びながら注意してゐると、貴方が此處に立つてゐるので、

大急ぎで歸つて來ました。」

小柄ながら頑丈作りの此の日本人の赤帽は、なつかしさうに語つた。自分は驚いて彼を見守つた。誰がこんなところで、同胞に逢はうと考へる事が出來るものか。

「東部はいゝでせうなァ。私なんかも、どうかして東部に行き度いと思ひながら、もうやがて日本を出て十年です。こんな田舍の砂の中に埋つてゐちや爲方がありませんからね。」

「僕も驚きましたよ。こんなところで日本人に逢ふなんて。」

「さうでせうとも。此處に來てからでも、もう二年近くなります。エ、その前ですか、その前はシアトルにゐたんです。市俄古に行くつもりだつたのが、金がなくなつてこんなところへ引掛つちまいました。」

「隨分寂しいでせうね。こんなところにゐると。」

「そりや寂しいですとも。しかし女房も子供もゐるんですから。」

「ヘエ、おかみさんも來てゐるんですか。」

自分は更に驚いて聲を高くした。

「イ、エ、日本から連れて來たんぢやないんです。此國の女ですよ。」

彼は一寸うつむいたが、急に沈んだ聲になつて。

「以前家庭勞働をやつてゐた家で働いてゐた女なんです。うつかり出來合つたところが、子供が生れましてね。長く外國になんかゐると人間も變な事になりますよ。」

自分の空想好きな性質は、忽ち此の男を一編の小說の中の人間に仕上げてしまつた。さうして彼の日に燒けた顏を、寧ろ同情をもつて眺めた。

直ぐに發車の時間は迫つて來た。自分は赤帽に促されて草を踏み分けて列車に歸つた。

「どうしても一度は東部に行きます。旅費さへ出來たら、かゝあや、がきなんかうつちやつて逃げますよ。」

それが終生の目的だといふやうに、彼は此の時肩を聳かして云つた。

「御きげんよう。」

「左様なら。」

自分の差出した手を、赤帽は固く握つて振つた。

汽車は容赦なく動き出した。窓から首を出して見ると、赤帽の矮少な姿は、月明の中に黒く佇んだが、見る間に霧の底にかくれてしまつた。

冷々と夜氣の泌む窓をしめて、人工的に暖められた室内の蒸されるやうな椅子にもたれ、自分は意外なところで、僅かに數分間の立話をした赤帽の姿を忘れ去る事が出來なかつた。

誰しもが踏む同じ徑路を彼も此の大陸で踏んだに過ぎないのかもしれないが、此の偉大なる平原の單調に疲れ、旅馴れぬ物の怖ろしさに固くなつてゐる自分の目の前に、突如として現れ突如として消えた事が、此の赤帽を一層鮮明に印象した。

不釣合に肩幅の廣い、脚の曲つた小男の姿も、妙にかすれた聲も、目に耳に殘つてゐる。それにしてもあんな小驛に赤帽としての收入があるのだらうか。彼の語つた斷片的の材料から、自分はあらゆる事を想像した。

女房も子もあるといふみすぼらしい田舍家が想像された。女房は肥りかへつた女に違ひない。子供は亭主に似て、黄色い顔に黑く粗い髪の毛の垂れ下つた貧弱な子に違ひない。その爐邊に毎日毎日起る夫婦喧嘩の光景さへ、自分は活動寫眞のやうに活々と描き出した。

何時か一度は東部へ行くと、蓬萊の島のやうな樂天地をロッキイの彼方に夢見て居る赤帽は、ほんとに妻も子も振り捨てさうな氣勢だつた。捨てられた女房、捨てられた子供の、哀れな有樣は更に明かに浮んで來た。逃げてしまつた日本人の父の血ばかりが、うす濁つて殘る子供の不幸な生涯が、此の大平原の物凄い景色を背景にして、彷彿として目に見えるのである。

自分は何時迄も何時迄も、とりとめもなく空想を逞しくして居たが、食事の時間も過ぎさうになつたので、狼狽てゝ食堂に行つた。

朝から晩迄搖られ通しに搖られてゐる人々は、疲れ切つて、寢床の用意を急がせた。自分も早く床に入つた。

何時の間にか汽車は坂路を上つてゐた。月の光のすさまじい、岩石の切立つた間に、何の大木

か蠢々と氷のやうな空をついて聳えるのを、窓の硝子に顔を押付けて覗いて見て、心も震へる程寂しかつた。

汽車は今夜ロッキイ山を越えるさうである。

三日目の朝も亦、輝かしい日輪の光を浴びてあけはなれた。疲れてゐる癖に寝苦しく、右に左に寝がへりして、長旅の夜を癒に障る程長々しく感じたが、それでも何時か熟睡した。熟睡のうちに汽車はロッキイを越え、目の覺めた時は、又單調な枯草の野を一直線に貫いて走つてゐた。

雲もない青空だ。僅かに、なだらかな小山を見るばかりで、汽車は秋風の平原に烈しく烟を吹き散らす。それでも昨日に引きかへて、時々は小さな村落を横切るのが、少しは心を慰めた。さういふ時は野に岡に、牛羊の群を懐しみ、窓硝子に顔を押付けて見た。鳥でも獸でも生きてゐるものはすべて、此の廣過る天と地と、その間にはびこる砂地の雜草より他には目に觸れない汽車の旅では、恰もそれが自分の骨肉だつたかのやうな情愛を感じるのである。

その癖同車の人間に對しては、自分は矢張り異人種だといふひがみを忘れる事が出來なかつた。

誰を見ても自分を絶えず注視してゐるやうに思はれて爲方が無い。彼等に對する無意味な畏怖と反抗が、交々自分を不愉快にした。

朝の食事の卓についても、運動不足の鈍い胃の腑は、一片の鹽豚さへ負擔だつた。苦い珈琲を半分でやめて席に歸ると、自分は極端な所在なさに伴ふ我儘な腹立しさに惱された。

汽車は退屈を乘せて走つてゐる。誰も彼も安逸に疲れた、油の浮いた顔をして、本を開いたり、手紙を書いたり、獨骨牌をしたりして、どうかして此の押しつけがましい倦怠から逃れようとあせつてゐるが、何をしても十分とは續かない落ちつきのない心狀にゐた。

自分は平生嗜まない煙草を頻りにふかした。幾本の紙卷煙草が、見てゐる間に煙になつて、喫煙室の窓から、大平原の秋風の中に、ちぎれて飛んで消えて行くのを、ぼんやりと眺めた。

それでも緩漫な運行を續けてゐる太陽は、午を過ぎて次第に傾いて行つた。ちつとも喰べ度いと思はないばかりでなく、寧ろ苦しい程胸に堪へる食事の後で、自分は又長い時間をもてあつかつた。早く今日も暮れて、寢床に入る夜が續しい。夜になれば、誰にも顔を見られずに横になる事

が出來る。眠つてしまへば退屈も無い。夜だ夜だ、夜に限ると思つたけれど、日はまだ赤々と平原に照りわたつて、黄ばんだ雜草に覆はれた行手には、何の變化も起りさうにもなく思はれた。

一時、二時、三時と、長い長い時間を刻む時計を、忌々しく思つた。

又しても本を開いた。直ぐに又根氣がなくなつて、それを伏せた。爲方が無くなつて、骨牌卓子を取寄せて、獨骨牌を始めた。三四種類しか知らないのを、繰返し繰返したが、どうしても成功しない。成功しなければしない程苛々して、骨牌を切る手も汗ばんで來た。王、女王、兵隊のやうな人間の形象をした札の出る度に、その顏面に、自分を嘲笑する表情があるやうに思はれて癪に障つた。今度成功しなかつたら、此の骨牌を窓から投捨ててしまはふと、ふと考へた。クラブもハアトも、スペエドもダイヤモンドも、五十二枚の骨牌が、人の子の住まない平原の秋風に亂れて飛散る景色を想像すると、その一枚々々の王、女王、兵隊はもとより、一から十迄の數札のひとつひとつに靈魂があつて、此の大空と平野の間を、不思議な姿をして踊り狂ふやうに感じられた。きつと何か、大きな不可思議が、窓から捨てられた骨牌から起るに違ひないと思つた。

それが又所在ない心の隙間に乘じて、やめる事の出來ない誘惑になつた。ほんとに今度しくじつたら、捨ててしまはふと思ひながら、自分でも驚いた程手際よく札を切つた。

「獨骨牌ですか。」

その時、向うの隅で、先刻から、例の赤い表紙の本を讀んでゐた娘が、立つて來て、活潑に自分の隣に掛けた。

「エ、、如何しても成功しないのです。今度こそ今度こそと、一生懸命なんですが、幾度やつても駄目です。」

「間の惡い時はそんなものですよ。」

娘は、自分が一枚々々めくつては並べる札に見入りながら云つた。

「エ、、ほんとに間が惡いんです。今度出來なかつたら、憎らしい骨牌を窓から捨ててしまはふと思つてゐます。」

自分は娘を驚かすつもりで云つた。

「エ、、捨てておしまひなさいよ。」

娘は面白さうに手をうつて賛成した。きつと、止めるだらうと思つたのに、意外にも一も二もなく捨ててしまへと賛成して興がる娘の子供々々した様子が面白かつた。

「捨てちまへ、捨てちまへ。」

自分は繰返して云ひながら、骨牌をめくつた。狭い腰掛に二人並んだので、肩と肩とは汽車の搖れる度に押合ひ、娘のうぶ毛の煙るやうな頸筋は、目の前に近々と迫つて居た。

「ごらんなさい、今度は吃度成功ですよ。」

少し出のいい札に調子づいて來た。

「出來てしまつては詰りませんねえ。折角骨牌の捨てられるのを見ようと思つてゐますのに。」

娘は醫のやうな頼べたの切傷をへこませて笑つた。

「駄目ですよ。今度はもうちやんと成功して見せますから。」

云ひながら、此處で成功してしまつては詰らない、しくじらなくては面白くないと、心の中で

は思つてゐた。

「サア、もう殘り少なくなつて來た。」

頻りにめくる札の順が、少し具合が悪くなつて來るのを祈りながら、最後の一枚迄場に並べた。

「アアア、とうとう又しくじつちやつた。」

自分はしくじつたのを滿足して、娘の顏を見た。

「フレエ。」

娘は心底から嬉しさうに、脣をまんまるくつぼめて、フとレの間に力強いッを入れて、叫んだ。

「サア、お捨てなさい。窓をあけてあげますから。」

とからかひ氣味に促し立てる。

「殘念だなア、もう一度やれば吃度大丈夫なんだけれど。」

自分は骨牌を取集めて、バラバラ切つて見せた。

「なんといつても駄目ですよ 兎に角今のは不成功だつたんですから。」

娘は圖に乘つて、それを捨ててしまへといふのである。

「なんなら私が捨ててあげませうか。」

堪らなく面白さうに、子供のやうに笑顔を傾けて迫つた。

「エエ、捨てて下さい。」

自分はわざと音をさせて、骨牌を卓子の上に置いた。

「ほんとですか。ほんとに捨てますよ。」

「よござんすとも。」

自分は眞正面から娘の顏を見て、笑ひながら云つた。

「それぢやあ一寸退いて下さい。窓をあけますから。」

云ひながら娘は自分を押しのけて、窓をあけた。冷たい風が威勢よく流れ込んだ。

「サ、捨てますよ。」

「お捨てなさいとも。」

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。」

娘は卓子の上の骨牌をつかんで、高く手を振りあげたが、流石に顏を赤くして、ためらつた。

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。」

同じ問答を繰返した時、娘の振上げた手は勢よく前に延びて、五十二枚の骨牌は木の葉のやうに窓外に飛んだ。

「アレアレ。」

二人はその窓から首を出して見た。一條になつて流れるやうに飛び散るのが、風に吹かれて舞上つて、夕日の中を蝶々のやうに飛散した。

「フレエ。」

娘は風に亂れた髪を氣にして首を引込めると、もう一度嬉しさうに叫んで笑つた。

「ハッハッハッハッハッハ。」

二人の騒ぐのに氣がついて、新聞に顔を埋めてゐた例の老爺は、眼鏡越に此方を見て、又しても氣になる高笑ひを送つて寄越した。

「何をしてゐますね。」

「今骨牌を投げ捨ててしまひましたの。この方が獨骨牌をしても、決して成功しないのですものの。」

「ハッハッハッハ。それは面白い。」

老爺は面白さうに身體を搖つて笑つた。

娘はそれには頓着なく、又窓の外に首を差し延して、遠く後の方を見送つた。

「今頃はもう白い蝶々になつてゐませう。」

自分は、それが飛散した時の印象を、口に出して云つた。

「マア、貴方は詩人ですね。」

娘はまだ、ふざけ足りない樣子で、窓をしめると、自分の顔を覗き込んでからかつた。

「日本人は誰でも詩人なのですつてね。誰かが書いてゐましたよ。」

「アア、あの十七音の詩を作る事でせう。さういふ手輕な意味では、吾々も詩人かもしれません。」

「ですが日本には、人を罵るやうな野卑な言葉は全く無く、言葉そのものが本來詩なのだといふではありませんか。」

「そんな事があるもんですか。全くいい加減な事ですよ。」

「だつて何かの本にちやんと書いてありましたもの。」

「どうしてどうして、日本人は人の惡口を云つたり、人を罵倒したりしてお茶を飲んでる國民です。惡口雜言の言葉は有過る程あります。第一吾々は嫉妬深いもんだから、眞心から人をほめる事は、如何しても出來ない位です。」

「ほんとですか、私の讀んだ本には、日本人は人を罵る言葉を持つてゐないばかりでなく、言葉は叮嚀で花のやうに美しいと書いてありました。」

「それは、世辭追從の言葉を好むといふ事實を、皮肉に云ひ廻したのではないのですか。」

「又そんな事を。――そんならほんとに日本にも人を罵る言葉があるなら、それを云つてごらんなさい。」

娘は說破し得て嬉しいといふ樣子をして、笑ひ度いのを堪へる顏つきをして見せた。

「だつて、いくら私が貴方の惡口を云つたり、貴方を罵倒したところで、それが日本語なら、ほめてゐるのか、惡口を云つてゐるのかわかりますまい。」

「イイエ、わかりますとも、第一語氣が違ふでせう。響が違ふでせう。」

娘は怜悧さうな目附をして、それは確にわかる事だといふ自信を示した。

「ネ、左樣でせう。ためしに云つてごらんなさい。羞かしいんですか。貴方は羞かしがりん坊。」

「馬鹿ッ。」

自分は自分でもハッとした程大きな聲で云つて笑つた。

「結構。」

娘は手を叩いて踊り上つた。

「ベケッ。」

わざと怖い顏をして、眞似をして喜んだ。

「ネ、上手でせう。ネ、ベケッ。」

娘は兩手の中に顏を埋めて、身を揉んで笑つた。

「ベケぢやありませんよ、バカですよ。」

「バカ。」

娘は云ひ憎くさうに、バとカの間を句切つて云つて得意がつた。

「ネ、上手でせう。バカ、バカ、バカ。」

「うまい。その通り。」

自分は娘をおだてて、その調子を直してやつた。

「ですが、馬鹿つて如何いふ意味なんです。」

「馬鹿つていふのはいろんな場合に使へるんです。ですけれど、意味なんかわからなくたつていぢやありませんか。その調子さへ飲み込めば。」

「左樣ですね。その調子丈で大凡はわかりますね。バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ。」

娘は止度なくバカ、バカを繰返し始めた。面白くて面白くて堪らないと云ふやうに、足踏をして拍手を取つた。

「バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ。」

自分もそれに合せてつぶやき始めた。

「バカ、バカ、バカ、バカ、バカ。」

二人は眞赤になつて笑ひながら、意地になつて繰返した。

とかくして、窓の外の平原には夕暮が迫つて來た。昨日にも增して赤い夕日が、遠くの岡の向うに吸ひ込まれるやうに沈んで行くのを、はかないものに思つて見送つた。

食事の用意の出來た事を知らせに、給仕人の黑坊が、大きな聲で振れて來た。他愛も無い話を物珍しさうに聞いたり聞かせたりして居た娘は、それ迄其處に興がつて居た。

「サア、やつと食事になりました。私は又あの老婦人と約束がありますから、食後に又何か面白いお話をきかせて下さい。」

云ひながら立上つて、

「吃度ですよ。」

とふりかへつて笑顏を見せたが、

「バカ、バカ、バカ、バカ。」

と口の中でつぶやきながら、自席の方へ身支度をしにかへつて行つた。

アアア、とうとう夜になつてくれた、と暗い夜に感謝して、平原をつつむ暗がりを、窓硝子を通してなつかしんだ。

昨日に比べては、樹木の茂りの多くなつた景色を、月は陰影多く照してゐた。あからさまに照

らされた部分は、凄い程青く、物の影は怖ろしい程黒かつた。終日待ち暮した夜のその景色は、自分の苛々した心持を、全く落ちつかせたばかりでなく、知らず識らず感傷的なうらはかない寂しさをさへ誘ひ出した。さういふ時に限つて感じられる故郷の遠い事、父母の遠い事が、異郷の旅の孤獨感を、一層強く色濃くするのであつた。何とも云へない涙ぐましい心持の自分を、吾ながら無上になつかしんだ。

「どうです、日本の紳士。」

驚いてふりかへると、例の老爺が、其處に近々と側に來て立つてゐた。

「どうも大層話がもてたやうだね、あの娘さんと。」

老爺は持前の淫靡な笑ひ顔をして、愛嬌のつもりなのか、からかふつもりなのか、自分の肩を人差指で一寸突つついた。

「あの娘さんはなかなかいいぢやないか。あれは君が好きなんだとさ、ハッハッハッハッ。」

彼は肩に波を打たせて笑つたが、自分が不愉快な顔をして見返したので、直ぐに眞面目な顔に

かへつた。

「どうです、まだ食事には行かないかね。」

「エエ、もう直き行きます。」

うるさいとは思ひながら、自分も爲方なく返事をしなければならなかつた。

「若しも差支へが無いなら一緒に喰べようぢやないか、その方が餘程經濟だ。」

又組合ひで食事をしようといふのだなと、自分は此間の不愉快な經驗を思ひ出して、老爺の顔を見詰めたまま返事をしなかつた。

「それとも、あの娘さんと一緒といふ約束でもしたのかね。ハッハッハッハッハッハッ。」

明かに自分を侮蔑した態度をかくさずに、あくどくからかつた。

「ハッハッハッハッハッハ。」

彼は反りかへつて、高々と笑つた。

「どうなさつたの。何か面白い事でもあるのですか。」

娘は身じまひを終つて、遠くの方から聲をかけながらやつて來た。

「貴方がたは、まだ食堂にはいらつしやらないの。」

「直き行きます。」

自分は、老爺に取りあつてゐる忌々しさを逃れる爲にも、娘を歡迎したかつた。

「行きませうよ。」

先きに立つて、引張つてでも行かうとするやうに、娘ははしやいだ調子だつた。

「エエ、行きませう。」

云ひながら自分が立上らうとした時だ。老爺は自分の肩に手を掛けて、耳に口を寄せてささやいた。

「ごらん。あの娘さんは君に惚れてるよ。ハッハッハッハッハッハッハッハ。」

こらへても堪へても堪へられないといふやうに、全身をゆすぶつて笑つた。

「ハッハッハッハッ。」

「馬鹿ッ。」

自分は老爺の手を振拂つて怒鳴つた。

「オウ。」

驚いて娘は目をみはつた。息も出來ない程驚いたのか、幼な氣な顔には不安と驚愕が一時にあらはれた。それを見ると自分も、アアはしたない事をしたと、心底から悔いた。

「ハッハッハッハッハッハッハ。」

老爺は又取つてつけた高笑ひをしたが、憎悪にみちたながしめを殘して、わざとらしく落ちついて、食堂の方へ歩み去つた。

「マァ貴方つて方は。」

娘はまだ息をはずませて、嘆息するやうに云つて自分を見守つた。

「サ、私達と一緒にいらつしやい。サ。」

今度は、子供をいたはる親しさで、そのくせ心配さうに、自分をなぐさめた。

「エエ、直ぐ後から行きます。」

自分は涙の浮んで來るのを感じて、娘の視線を避けた。

「吃度いらつしやい。待つてますよ。」

娘は繰返して云つて、

「貴方はバカ。」

となぐさめ顔に、首をかしげて微笑して、さうしてこれも食堂へ急いだ。

自分は冷たい窓の硝子に額を押付けて、目頭に浮んで來る涙を堪へようとした。はしたない自分の行爲を後悔する心は、やがて異人種の孤獨と寂寞を限りなくはかなく思はせた。

「馬鹿ッ。」

自分で自分の意氣地なさを罵つてみたが、何の甲斐もなかつた。

明日も明後日も、まだ先の見えない此の汽車の旅の遠い行手を思つた時、涙は遂に頰を傳つて落ちた。（大正七年五月十六日稿了）

大都の一隅

古代埃土希臘から近代に至る迄の夥しい繪畫、彫刻、瓶子、織物、細工物、あらゆる藝術の勝れた作品を、ひとつひとつ順々に見て廻るうちに、暮れやすい日はいつか傾いて、美術館の内部はうす暗くなつて來た。

梁瀬は先刻から二三時間も歩きづめに歩いてゐた疲勞を一層強く感じて、まだ全館の半分も見ないのではあるが、今日はもうおしまひだと思つて、足を停めた。丁度その足をとゞめたところの少し仰いで見る壁の中央に、エドワアド・バアンージョオンスの「戀の歌」がかゝつてゐた。彼はそれを見ると、友だちに逢つたやうな氣がして、恰も室の眞中に置いてある長椅子に腰を下して、改めてその繪を仰ぎ見た。三週間ばかり前、愈々この亞米利加をさして日本を離れる前日に、相模の海岸の病院に不治の病軀を養つてゐる親友に別れを告げに行つた時、藥品の臭の鼻をつくその病室の白壁に、寫眞版の此の繪がかゝつてゐて、額ぶちと寫眞の間を埋めた鼠色の羅紗紙に、

"Hélas ! Je sais un chant d' amour,
Triste ou gai, tour a tour."

と友だちの癖のある下手な字で書いてあつた。少し熱があるといつて寢たまゝ話をしてゐる友だちの寢臺の側に、寂しい心持で腰かけてゐた梁瀬は、慰安の言葉の見出せない所在なさに、二三度口吟んでその句を覺えてしまつた。今も亦それを一人で口に出してつぶやいてみた。友だちの氣の毒な身の上が想はれると共に、この水彩畫を親しいものに思つたのである。

遠く牧場を望む廣場の草の上に坐つた若き騎士は、目の前に歌ふ女を見詰めてゐる。女は片手には開いた本を持ち、片手ではオルガンを彈いてゐる。そのオルガンの傍には翼を持つ人の姿で、目かくしをし、薔薇の花輪を冠にしたのが坐つてゐるのである。此のラファエル前派の詩的空想は紅、うす紅、紫、黄、青、水あさぎ、さまゞのこまやかな色彩に柔かい階調を保つて、うす暗い室内に優婉に暮れ殘つた。

ぼんやりそれに見入つてゐるうちに、疲れた彼は眠くなつた。

「お母さん、あれ日本人？支那人？」

ふと子供の聲がしたので驚くと、目の前を若い母親に手を引かれて、まるまると肥つた五歳六歳の男の子が、物珍しさうに彼の方を見たがるのを、母親は困つてぐんぐん引張つてつれて行つてしまつた。半ヅボンの下から眞白な膝つ子の出た足は、殆んど駈足で引擦られるやうにつれて行かれながらも、その子の好奇心は梁瀬の黄色い顔をふりかへつて見ないでは承知しなかつた。

梁瀬は又かと思つて苦笑した。シアトルの港に上陸した日から、毎日々々往來で繰返す不愉快な經驗だ。日本人は支那人よりも遙に強く優越した國民だといふ自負心が傷つけられると同時に、昨日迄世界の優等國民だと勝手に決めてゐた安心が根底からぐらついて來た。太平洋を越えた此の岸では、天孫人種だと稱する吾々も、吾々がちやんちやん坊主といやしめる支那人も、ひとしなみに劣等な國民としか見えないのであつた。

梁瀬は自分自身を慰める爲にわざと舌打ちをした。時計を出して見ると閉館時間に近づいてゐるので、もう一度バアンージョオンスの繪を仰ぎ見て、さて出口を志して歩き出した。

勝手がわからないので、無暗に廣く思はれる繪畫部の室内を足早に拔けて、稍廣い廊下に出ると、いづれも歸りを急ぐのであらう、同じ方角に向つて行く人が澤山あつた。それにまじつて歩いてゐたが、ふと、石の太いまろ柱のかげに、一人の男が畫架に向つて鉛筆を走らせてゐるのを見た。ふりかへつて見ると、その後姿はどうしても東洋人である、何氣ない風をして少し横手に廻つて見ると、頰骨の高い黄色い貧弱な顔は疑ひもなく東洋人だ。梁瀨はそこいらを通り過ぎる白皙人が珍しさうに此の美術學生をかへりみてゆくのを見ると、自分も亦彼と同じ黄色い顔の持主である事を耻ぢた。その男が其處に貧弱な風采をして、大理石の女の裸身像を寫生してゐるのを憎んだ。その男をふりかへりふりかへり見て行く人々の目の色から、全體としての黄色の民が理不盡に侮蔑されてゐる光景をまざ〳〵と見せつけられる爲に、彼の存在が無かつたら吾々も亦輕侮は受けないのだといふやうな非論理的な感情が起きてゐたのである。しかし次の瞬間には、その男の猫脊と、中凹みになつた平べつたい胸と、ちり毛もとの寒さうな首筋から推察して、彼は支那人だと思つた。日本人ではなかつたのだと考へて安心した。支那人ならば自分とは緣が遠い

と思つた。もう自分が支那人と同一視されてゐる事は瞬間的に忘れてしまつて、矢張り日本人の自負心に依賴してゐたのである。

その男が支那人だと決まると、梁瀨は一度通り過ぎたが、先方の氣のつかないのをいゝ事にして、又後戻りして、後からそつと肩越にのぞいてみた。

誰の作だか知らないが、全身裸體の女の、右の手は高くうしろに廻して、洗つて解いた髪を握り、左の手は輕く乳房を抑へてゐる立姿の、少し反身になつた胸から腹の曲線が大きくうねつてゐる邊迄、既に鉛筆は運んでゐた。うまいかまづいかは、もう少し近寄つて見なくてはわからない。支那人なら構ふものかと思つた時、その男は人の氣配に鉛筆を止めてふりかへつた。梁瀨は流石に何氣ないふりをして、今通りかゝつたやうに見せかけながら歩き出した。

「君、君。」

いきなり後から呼止められた時、それが明瞭な日本語だつたので梁瀨は吃驚してふりかへつた。

「君、君。君は日本人でせう。」

その男は三脚を離れて立上つて、梁瀬の方へ近寄つて來た。

「君は日本人でせう。」

「エエ、さうです。」

赤面して梁瀬は答へた。

「ね、矢張りさうだ。日本人は直きわかりますよ。」

男は自分よりも餘程脊の高い梁瀬を下から覗くやうに見上げた。

「君はまだ日本から來たばかりでせう。どうもさうらしい。」

「さうです、まだ來たばかりです。町に着いたのは四五日前なんです。」

「ヘエ、四五日前に來たのか。」

彼は少しの遠慮も無い態度でしけ〳〵と梁瀬の顏を見守つた。

「一體君は何處で働いてるんだい。」

といつの間にか言葉もぞんざいになつて來る。

「何處で働いてるるつて。」

「さうさ、何をしてるんだい。家内勞働かい。」

梁瀬は恥ぢて其間の意味がわかつた。

「イイエ、僕は學生なんです。」

「僕だつて學生さ。」

男は昂然として云つた。

「學生だつて君、金錢がなくちやあ學校に行けやしないや。なにかい、君は金持かい。」

梁瀬は馬鹿々々しくなつたので、默つてその貧弱な小男を見下して、今でも矢張り彼は日本人ではなくて支那人なんだといふやうに思へてしかたがなかつた。

「C町にるるつて云へば、H大學にでも入るんですか。」

男は輕蔑したやうな、しかし又尊敬の準備をしてるるやうな落つかない態度で、言葉も亦叮嚀になつて、しげしげと梁瀬を見詰めてるる。

「エヱ、H大學に入る手續を昨日濟んだばかりなんです。一學期には遲れてしまつたけれど、遲ればせにゝ講義丈は聽き度いと思ふんです。」

「へエ、H大學の生徒なんですか。隨分金錢が入るだらうなあ。」

梁瀨はその男の口ぶりのいかにも卑しいのを侮蔑しないではゐられなかつた。彼は經濟學を學んでゐるのではあつたが、子供の時から藝術の作品を熱愛し、引いては藝術家を尊敬する心を持つてゐて、ともすれば藝術家だといふ單純な一事で、その人間を過重に敬ふ傾向さへ免れなかつた。從而此の美術學生の態度は、彼が心に描く藝術家のそれと、甚しく相反するので、反動的にも輕蔑し度くなるのであつた。

「貴方は始終此處へ寫生に來るんですか。」

「僕ですか、僕は此の裏手の美術學校にゐるんですが、一週間に一度づゝ何かしら畫いて教師のところに持つて行つて見せなくちやならないので、此の模寫を始めたんですよ。僕だつてもうちつと腕がありやあ、いゝ金を取るんだがなあ。」

と妙に氣ぎんな顔をして笑つたが、梁瀨は笑ひもしないので、何かしら具合が惡さうに、

「この國ぢやあ、君、絵かきは實際いゝ職業なんですぜ。」

と眞顔になつてつけ足した。

梁瀨は益々つまらなくなつて、機會さへあれば逃げようと思つたが、そのいゝ機會が見當らなかつた。

男は一人で面白さうに、美術學校には女の生徒が多いとか、月謝は幾何だとか、もう少したつと生きたモデルの、しかも裸體のが描けるとかいふやうな話を他愛もなく續けたが、

「アア、何時の間にか暗くなりやがつた。」

とつぶやいて、黄昏の忍び入つた室内を今更のやうに眺め廻した。

「もうおしまひにして、出ませうか。」

さも初めからの道連れだつたやうな口のきゝ方をして、

「一寸待つて下さい。直き片附けますから。」

と云ひながら畫架の方へ馳出したが、見る間にそれを三脚と一緒に短くたゝんで、畫板を腋の下に挾んだ手に提げて來た。

「サア行きませう。お待遠さま。」

彼は先に立つて歩き出した。

もう館内には人の影も見えなくなつた夕方の暗い中に、うす白く光る石階を並んで下りると、男は又梁瀬を待たせて、その畫架と三脚を何處かへ預けて來た。

館外に出ると、存外まだ明るくて、前庭の廣い芝生の上の夕空は靜に高く仰がれたが、その空の幾分は黑い雲に覆はれてゐて、晴れた部分が透き通る程澄んでゐる丈暗かつた。間も無く夜にうつりゆく暫時の間を、ためらひ勝に暮れて行く光の中にも、秋に限られた寂しさが漂つてゐる。人工的に溫められた館内から出て來たので、少しの風も寒かつた。梁瀬は手に持つてゐた外套を着て、先立ちの男の後について行つた。

目の前にひろがる大都は既に暗い影になつて、ところどころの教會のゴシック風の屋根ばかり

が抜き出て高く暮れかねてゐる。知らない土地の夕暮を梁瀬は身にしみて感じた。

「アアア、腹がへつちやつた。」

男は吸ひ盡した煙草を投げ捨てると、それを追ひかけて行つて踏み躙りながら、力の無い聲でつぶやいた。

「どうです、これから倶樂部へ行つて牛鍋でもつゝつきませんか。」

「倶樂部？」

「エエ、日本人會ですよ。晩にはみんな寄つて一緒に飯を喰ふんです。吾々には矢張り米の飯でなくては駄目ですからね。」

「だつて僕は會員ぢやありませんもの。」

「會員でなくたつて構はないんです、僕と一緒に行けば。そりやあ愉快ですよ、いろんな奴がゐますからね。兎に角來てごらんなさい。」

彼は熱心にすゝめるのである。

梁瀬はC町に來てから、H大學には日本人も少しはゐるとは聞いてゐたが、別段友だちでも無し、人を戀しがる性質でもなし、殊に外國では知らない同胞などゝうつかりつきあつてはゐられないと考へて居たので、此方からたづねて行く氣も無かつたが、この學生にあつて、兎に角暫時は獨語の他には口にした事の無い日本語を話してみると、不自由な英語の發音を氣にしながら胸をどきつかせて、もどかしく話すよりは氣樂でいゝ。その日本人會といふのに行つて見て、海外生活をしてゐる同胞に逢ふのも、一の新しい世界を見る事だから面白さうに思はれる。多少はあつた危惧の急を打消して、梁瀬はその男の誘ふまゝに、一緒に大通りを歩いて行つた。

兩側の並木の楡楓は殆んど散りつくし、僅かに殘つた枯葉は、うそ寒い樟の風に吹かれて鳴つてゐる。大店は早くから戸を閉めて靜まりかへつてしまつたけれど、繁昌の中心には少し遠いこいらの町の小さい店は遲く迄商賣をしてゐるので、果物屋、煙草屋、菓子屋、染物屋、小料理屋などの軒を並べてゐる間に、殆んど町の角々には生藥屋か酒屋が、一際明るい燈火を往來へ投げかけて、出入りの人の足も絶えない繁昌を見せてゐる。何處からともなく肉を燒く匂ひが流れて來

るのを感じる頃は、町にはうすく霧がかゝつて、その霧の底の底に、ところどころ星屑の三つ四つ五つづゝ、雲切れのした空の間にちらばつてゐるのが仰がれた。

往來の人は多いけれど、何れも先を急いでさつさと擦れ違つてしまふのであるが、時々はその町角の酒屋酒屋から、嚙煙草の赤い唾をぺつぺつと吐きながら、足下も危なくよろけ出て來る醉拂ひもあつた。そんな時にふと立別れても、また直ぐに二人は肩と肩とすれすれに並んで歩いた。一人は猫背の脊中を愈々まるくして默々として歩いてゐる。梁瀬は外套を着てもまだ冷々する十一月の夜の空を屢々仰いでは、故郷の遠い事を想つた。

「君、君。一寸此處に寄つて行きませんか。」

ふと二三歩遲れた連の男に呼ばれてふりかへると、今通り過ぎた酒屋の入口を指して男は立ちどまつたのであつた。

「ね、一寸一杯麥酒でも飲んで行きませう。」

彼は梁瀬を促しながら、その酒屋の重い扉を押して入つた。濛々として煙草の煙は天井から下

がつた幾つかの電燈の光をくもらせてゐるので、そこいらにうよ〳〵してゐる客の姿も明瞭とは見えないが、たゞ雜然と人々の話し合ふ聲が入りまじつて、喧嘩口論をしてゐるやうな騷がしさである。

バアの前に立つて、男は兄分らしい態度で梁瀨の好みをきいてから、麥酒を二つ命じた。

「グッド、ラック。」

彼は得意さうに云つて、何も知らずに梁瀨が既に口のはた迄持つて行つた硝子杯に彼の硝子杯をかちりとあてゝから、上に浮んだ雪白の泡を一息に床の上に吹き飛ばして、扨て仰いで飲み干した。

「もう一杯どうです。」

と梁瀨を見上げたが、そのまゝ返事も待たずにおかはりをいひつけて、それも亦一息で飲み干した。

「アア、いゝ氣持になつた。どうしても爲事をした後では、一杯やらなくちや駄目だ。」

一人言めかしてつぶやいたが、梁瀨が衣囊から小錢入れを出したのを見ると、

「どうも濟まないなあ、君に拂はしちやあ。」

と云つたが、別段濟まないこゝろもなく、先きに立つてさつさと戸外に出た。

「どうも濟まないなあ。」

後から出て來た梁瀨を町角で待ちうけて、又同じ事を繰返したが、

「だけどいゝや、君は金持ちなんだから。」

とつけ足した。

夜の霧は深くなつて、店々の燈火もうすぼんやりと滲んで來た。少し醉の出た顏に觸れる風もしめつぽく濡れてゐる。

「今夜は雨だ。」

しばらくして男は一度空を見上げたが、又持前の猫背になつて足早に歩いた。

間もなく先立ちになつた男は、町角の或るうす暗い建築物の前に立停つた。

「此の二階が倶樂部なんです。」

と云つて指さす上の方の霧にくもつた窓硝子から、ぼんやりと燈火がさしてゐる。入口の石段を上つて重い扉の内に入ると、うす暗い廊下で、直ぐとつゝきに急な階段が稍妻形に二階の方へ導いてゐる。二人はそれを上つて行つた。

二階へ上り切ると狹い廊下で、又三階へ導く階段がうすぼんやりと見えたが、それよりも手近い目の前に倶樂部の入口があつた。

連の男が戸をあけた時、梁瀨はそのすき間から渦巻いて出て來た烟草の惡臭と、その烟草の煙の底に騷然と談笑する人の氣配に襲はれた。

「今晩はお各樣をつれて來たぜ。」

猫背の男は室内に入ると、大きな聲で云つて、

「さあ君、入りたまへ。」

と梁瀨を促した。

内部は二つの部屋に分れてゐて、廣い方には大きな食卓が置いてあつて、其處には誰もゐなかつた。奥の狹い部屋には長椅子や椅子やちひさい卓子が不規則に亂れてゐた。そこには三人の日本人が烟草の煙に埋もれてかたまつてゐた。三人とも上衣を脱いでシャツの袖をまくりあげてゐるが、一人は長椅子の上に横になつて飲み干したまゝの硝子杯を胸の上で弄んでゐると、他の二人はその前に腰かけて、これも硝子杯を手にしてゐた。片つ方の大男は頭に繃帶をしてゐた。卓子の上には空になつた麥酒の瓶が四五本並んでゐる。蒸氣で溫められた室内はむんむとして、梁瀨は直ぐに外套を脱いだけれど、幾度となく額の汗を拭かなければならなかつた。

「この人はね、H大學の生徒なんだ。」

猫背の男は梁瀨を一同に紹介した。

「僕がね、美術館で寫生してゐたら偶然出つくわしたのさ。まだ此地に來たばかりだつていふから、兎に角飯を喰ひに來たまへつて連れて來たんだ。いづれ會員になつて貰ふんだから。」

「H大學の學生だつて、マア此方に來てかけたまへ。」

「吾々のところでは遠慮なんかしてちや駄目だ。」

そこで梁瀬も手近い椅子を引寄せてかけた。

「オイ井上、もう一本麥酒を抜いてくれ、珍客の健康を祝さうぢやないか。」

長椅子に寢轉んでゐるのがしはがれた聲で呼んだ。

「駄目だ、駄目だ。僕のゐないうちに勝手に飲んだりするのは規則違反だ。前金でなければいけないつて醫師が云つたぢやないか。」

「なんだと、貴樣のゐないうちに勝手に飲んだつて、誰が勝手に飲んだ。誰が勝手に飲んだつていやあがるんだ。」

長椅子の男はふらふらする身體を起して、猫背の男――井上にむかつて怒鳴り出した。

「そりやあ飲んだつていゝさ。けども前金ていふ規則だから、僕が後で醫師に叱られるからね。」

「ぢやあなにか、俺が飲み倒して拂ひはしないつていふんだな。」

彼は危ない足を踏みしめて、よろけながら廣い部屋の方にやつて來た。

「さうぢやないんだよ。だけど規則だからなあ。」

井上は困つた顏をして、なだめるやうに云ふのである。

「兎に角此處にあるものは僕があづかつてゐるんだから、麥酒だつて拂つてくれなくちや困るんだ。」

「だから誰が拂はないつて云つた。金なんざいくらでもあらあ。」

「よせよ先生、怒つたつてつまらねえや。」

頭に繃帶をした大男は舌つたるい子供子供した聲で横あひからなだめた。

「井上君、兎に角もう一本抜いてくれたまへ。今日は僕の退院祝ひなんだから、先刻の分も一緒に後で僕が拂ふよ。かう、こんなもんだ。」

と云ひながら片足あげて、づぼんの衣嚢の上から叩くと、ちやらちやらと銀貨が鳴つた。

「ハ、、、、俺も當分成金だ。」

「なくなつたら、又ぶつけりやあいゝのさ。」

もう一人の眼鏡の男も笑つた。

「ひでえ奴さ。自働車を衝突さしといて、儲けやがつたんだからな。」

みんな聲を揃へて笑ひ出した。酔拂つてゐるので際立つて高く響く。

「ぢやあ大丈夫かい。きつと拂はなくちやいけないよ。」

「うるせえなあ、こいつは。拂ふつたら大丈夫だよ。二本でも三本でもいゝや、ありつたけ抜いちまへ。」

大男は又銀貨をちやらつかせた。

「爲様のねえ奴等だなあ。」

井上は輕く舌うちしながら臺所へ通ふ戸をあけて引込んだが、直ぐに三四本麥酒瓶を抱へて來た。

ぽんぽんとその口を抜くいゝ音を取卷いて、座にゐる者の顔はひとゝころに揃つた。

「僕も一杯御馳走にならう。」

井上は他の者が各々勝手に注ぎ終ると、直ぐに手を出して自分の前の硝子杯を滿たした。

「いやな奴だな、さんざ文句を云やがつて。手前も飲むんぢやあねえか。」

大男はいゝきげんで彼の背中を叩いた。

「オイオイ、お客様にもお酌しろよ。御遠慮遊ばしていらつしやらあ。」

先生と呼ばれる長椅子の男は、とろんこの眼を据ゑて梁瀬を見た。彼は物を言ふ度に激しく目をしばだゝき、顔面は痙攣してぴりぴり動いた。なみなみとある麥酒の硝子杯を持つ手も震へて、酒はさかづきをあふれて流れた。

「君はそりやあ、H大學の學生かもしれないさ。金持なんだらう、どうせ。しかし僕は——僕は藝術家だ、藝術家なんだ、僕は。」

「先生、お株はよせよ。」

「又始めやあがつた。」

他の者はせゝら笑つて取會はずに麥酒を飲んだ。

「やかましいやい、運轉手め。貴樣達には藝術はわからねえんだ。俺は此の人と話をしてゐるんだ。――どうだい君は、藝術を解するかね。」

梁瀬は先刻からの光景が豫期したよりも亂脈なので、どうしていゝか困つてゐたが、又此の醉拂ひに話をしかけられたので、なんと返事をしていゝか弱つてしまつた。

「どうだい君は、繪はわかるかい。」

「さうですねえ、わかるかわからないか知りませんが、好きは好きです。今日も美術館に行つて見ました。さうして井上君に逢つたのです。」

どうしても返事をしなければ承知しないので、彼は當らず障らずの事を云つた。

「井上？あんな奴は君、藝術家ぢやないさ。あれは――あれは職人だ。しかも技倆の無い職人なんだ。なあ井上、貴樣は職人だなあ。」

「僕か、僕は職人さ。先生のやうな提灯の繪を書いてる藝術家とは違ふんだ。」

「なんだと。」

醉拂つたのはいきなり目の前の硝子杯を取ると、相手を目がけて叩きつけた。飲み殘しの麥酒は井上の肩から胸にかけてかゝつたが、ねらひはゝづれて、後の壁にあたつて微塵に碎けて飛んだ。

「よせ、よせ。どうしたつていふんだ。」

「先生、醉拂ふにはまだ早いぞ。」

他の二人は、なほ怒つてあばれさうな先生の細々と痩せた身體を兩方から抱へて、奥の部屋へ連れ込むと、以前の長椅子の上に押倒してしまつた。押倒された先生はちつとも抵抗しないで、寢かされたまゝに寢てしまつた。

「井上君、君もよくねえや。先生のはあれが癖なんだから、なんとでも云はして置けばいゝぢやないか。」

「ほんとだぜ。俺は藝術家だ、俺は藝術家だつて云ひながら、中氣で何も畫けないんだから氣の毒なものさ。あれで以前はいゝ技倆を持つてゐたさうだぜ。」

眼鏡は云ひながら長椅子の方を振りむいたが、先生はもう鼾をかいてゐた。

「そんな事は兎に角、そろそろ飯にしようぢやないか。」

「今日は醫師が、是非ともすきやきにしてくれつて注文して行つたんだが、如何したんだらう、忙しくて來られないのかしら。」

井上は平氣な顏をして、床の上に落ち散つた硝子杯の破片を拾つてゐたが、

「どれ飯の支度でもしよう。」

と云ひ捨てゝ、臺所に引込んでしまつた。

殘つた二人は取りちらかした食卓の上に殘つて居る麥酒瓶を順々にさかさにしては、最後の一滴迄したんで飲んだ。

「どうです驚いたでせう。君達紳士はかういふ生活は知るまいからね。しかしみんないゝ人間なんだ。」

眼鏡の男は烟草に火をつけて、椅子の背にもたれかゝりながら、自分の事、他人の事を面白さ

うに話し出した。

彼は此の市の法律學校の生徒で、夏の休暇の間に稼いでは勉强の資を得てゐるのだと云つて、ひそかに自分は他の者よりも眞面目であり、知識的であるといふ意味をほのめかした。先生と云ふのは聖路易の博覽會の時、渡米した日本畫家だが、別に儲け爲事があるわけでもなく、時には物好きな米人が大幅を畫かしてくれる事もあるけれど、大概は扇や岐阜提灯の繪を畫いて暮してゐるので、それさへ何時かしみこんだ酒毒に腕が震へて、滿足には働けないのださうだ。井上は西部の果樹園に働いてゐたのが段々と東へ流れて來て、此の地方へ來てからは、此の倶樂部の賄と留守番を兼ねてゐる他に、美術學校の掃除番として働く傍、繪をならつてゐるのださうだ。何れも日本を出てから永い年月を此の大陸に流浪してゐる連中であつた。

「この人はね、これは自働車の運轉手さ。」

と眼鏡は繃帶の大男を指さして云つた。

「僕はね、この山根君なんかと違つて學問はありませんや。」

彼は人のよさゝうな笑顔を見せて引取つた。

「この郊外の百萬長者の家にゐたんだが、其處のうちのかゝあを乘せて走つてると、丁度町角でよその自働車と衝突しちやつたんでさ。かゝあは無事だつたが僕はこの通りやられちやつてね。かうつと、あれで四週間も病院にゐたかしら、非道いめにあつたものさ。」

「だつていゝや、うんと見舞金にありついたんだから。」

「ちげえねえ、そんなものか。」

二人はさも面白さうに高々と笑つた。

その笑ひの終らないうちに、こつこつと戸を叩く音がして、直ぐに四十かつかうの小柄な男が入つて來た。見知らない梁瀨の顔を不思議さうに見たが、

「イヨオ、お揃だね。」

と他の者の方に挨拶した。

「どうしたい。君はもう癒つたのかい。」

「エ、、やつとよくなりました。今日は久しぶりでみんなの顔でも見て、退院祝ひをやらうと思ひましてね。」

「あんまり飲むと傷に障るぞ。しかし痕は殘らないのかい。」

「どうですか。殘つたつて構ひませんや。」

「もともと好い男でもないんだからね。」

「ひどいなあ、醫師。」

大男はさも參つたやうに頭を掻かうと手をあげたが、繃帶に氣がつくと、そつと上から抑へたばかりで下してしまつた。

醫師は椅子に掛けると、又梁瀨の方を見て合點の行かない樣子だつた。

「此の方は。」

遂々彼は訊ねた。

「此の人はH大學の學生で、まだ日本から來たばかりなんだが、井上が連れて來てね。」

「井上君に美術館であひまして。」

梁瀬は眼鏡の男の説明を引取つて、自分で名告つた。

「ア、さうですか、よくいらしやいました。僕はこの階下で開業してゐる齒科醫者です。不肖ながら此の會の會長をしてゐますものです。」

ひどく改まつた態度でわざわざ椅子を離れて挨拶した。それから自分が長い間此の國で苦しんで、遂々齒科醫の免狀を取つて、今では米人の客も多いといふ自慢話を、この人の癖らしい大げさな身ぶり手ぶりで梁瀬にきかせた。

「兎に角亞米利加は偉大ですからな。日本なんかゝら來ると、隨分驚く事が多いでせう。」

醫師は二十年の間遠ざかつた日本については殆んど全く無知識であつた。さうして亞米利加の物質文明を、いかにも淺薄な誇張を加へてほこつた。紐育のウルワアスの建築は何十何階だとか、ボストンの市中丈でも自働車の數は幾臺だとかいふやうな話が多かつた。

「どうしたんだ、大分飯は遲いぢやないか。」

話が切れると時計を出して見て、つぶやいた。

「井上君、まだかい。」

大男は立上つて戸をあけて、臺所に聲をかけた。

「もう直きです。直ぐです。」

井上は途方もない大きな聲で答へたが、間もなく大皿の上に生々しい血の色に濡れた牛肉の盛られたのと、鍋とを兩手に持つて出て來た。

「醫師、遲くなつて濟みません。」

彼は又引込んで、今度は茶碗、皿、箸などを運び出した。

「山根君、濟まないが、ちつと手傳つてくれないか。」

「よし來た。」

眼鏡と大男とは受取つた器物を食卓の上に配置して、眞中のアルコオルランプの上に鍋をのせて燐寸を擦つた。玉葱と一緒にぶちこんだ肉は見る間に煮え立つて、物の臭ひはむらむらと室内

に漲つて來た。

「うまさうだなあ。こいつでもう一杯やらうぢやねえか。」

大男は眼鏡をかへりみて云つた。

「退院祝ひだ。おごつてやらあ。」

「たまにやそれもいゝや。ねえ醫師、御馳走にならうぢやないか。」

「さうさね、この人は退院するし、日本からのお客はあるし、今晩は僕もおごらう。」

「こいつはありがたい。」

井上は頓狂な聲を出して額を叩いた。

「ぢやあ僕は僕の分丈出すよ。」

云ひながら醫師は錢入から銀貨をつまみ出して、卓の上に置いた。

「さうか、それぢやこれが俺の分だ。」

大男も同じ程の金を出した。

「君は先刻のも拂つてくれなくちやいけないぜ。」

井上はその金を算へながら催促した。

「わかつてらい。催促なんかされたくねえや。」

大男は今度は札を抜出した。

「ほら、今晩の飯の代もはいつてら。」

「飯の代なら俺も出さう。」

眼鏡も小錢を其處に並べたので。

「ぢやあ僕も拂はして貰ひませう。おいくらです。」

と梁瀬は井上にむかつてきいた。

「イヤ君はいゝよ、君は。君は今晩はお客樣だ。」

醫師は手を振つて、井上の返事を打消した。

「でも兎に角拂ひませう。」

梁瀬は眼鏡と同じ額なら間ちがひはないと思つて、卓上の銀貨をかぞへた。

「二十五仙でいゝんですか。」

「ちやあ貰つとけ、貰つとけ。」

醫師は其處に集つた金をひとまとめにして、井上が持つて來た手篋のやうなものに納めて鍵をかけた。

「こいつは今晩はお正月だ。」

井上は狡猾さうな笑を浮べて、臺所から麥酒瓶を兩手で抱いて出て來て、惜氣なく拔いた。

「オイオイ、三階の奴はどうしたい。」

醫師は一口つけた麥酒を下に置いて云つた。

「さうさう、すつかり忘れて居た。呼んでやらないと、後で又しつきりなしに怒りやがるぞ。」

眼鏡は立上つて入口の戸をあけたが、顏をつき出すと大きな聲で怒鳴つた。

「齋藤ッ、飯だぞ。」

そのまゝどしんと戸をしめたが、その反響の消えないうちに三階から足音荒く馳け下りて來て、室の中に飛込んだ若い男があつた。

「どうしたんだい。あんまりひつそりしてゐるから、居るのか居ないのか忘れちやつた。」

眼鏡が云ふと、それには返事もしないで、手に持つて居る大きな瓶を高くあげて振つて見せた。

「なんだい、それは。」

「なんだかわかるまい。」

一人で嬉しさうに笑ひながら、彼はその瓶をあかりに透かして見てゐる。蒼白な顏をきれいに剃つて、頭も厭味な程叮嚀に分けた此の男は、長い胴と短い脚の釣合が極めて惡く、その爲に頭ばかりが大きく見えた。

彼はその瓶の栓を取ると、手近の皿を引寄せて、瓶の中の肉塊を手づかみで引張り出した。烈しい藥の匂ひが強く鼻孔を刺した。

「腦だらう。」

と誰かゝ云つた。

「こんな腦があつて堪るもんか。」

醫學生の齋藤はその肉塊を人々に見せた。女の肉體の一部だ。みんなが驚いて皿の上に頭を寄せ集めたのを、彼は得意さうに笑つて眺めてゐた。

「これはね、つい此間自殺した女のなんだ。まだ處女なんだぜ。」

「へエ、これがかい。」

大男がわざと黄色い聲を出して覗き込んだので、又笑聲が起つた。

「身體に變調を來したもんだから、姙娠したと思ひ込んで、寫眞に使ふ藥を飲んだんださうだ。」

「處女で姙娠するやつがあるもんか。」

「だつてまだ亭主はないんだぜ。」

「亭主はなくたつて男がありや處女ぢやないや。處女でなあ生娘の事なんだ。」

眼鏡は知識をほこるやうに相手を追及した。

「なんでもいゝや、兎に角美い別嬪さんだ。」

齋藤は面倒臭さうに云つてのけながら、肉塊をひつくりかへしたりなんかして、他の者に説明してゐる。

「いやだ、いやだ。こんなものを見ちや飯が喰へねえや。」

大男は眞先きに自分の席にかへつて、鍋の肉をつゝき始めた。

「一體何處でそんなものを手に入れたんだい。學校でくれるのかい。」

「くれるもんか。小使につかまして切取つて來たんだ。」

齋藤は醫師に答へながら、手早くもとの瓶の中に納めて、室の隅の棚の上に置いた。さうしてその肉塊を載せた皿を臺所で洗つて來た。

「オイオイ、その皿で何か喰はされちや堪らないぞ。」

醫師が眉をひそめて云ふと、

「ナニ俺が喰ふよ。」

と云ひながら彼はほんとにその皿に牛肉を取り分けた。

「なんにも汚ない事はありやしないや。おまけに別嬪なんだ。」

いかにも空腹さうにがつがつ喰ひ始めた。

麥酒はしきりに拔かれ、みんなの顏が赤くなつて來た。

梁瀨は殊に强ひられて、もとよりいける口だから、注がれるまゝに飲んだ。少し醉が廻つて來ると、この不秩序に亂脈な一室を、北米の大都の一隅に見出した事が面白く思はれて來た。誰も彼も無智で皮相で、しかも此の亞米利加を無反省に崇拜し、自分達がその崇拜の國に長くゐるといふ事を何よりのほこりにしてゐるのが寧ろをかしくて、その何れに對しても自分の優越を感じるのが、醉ひ心地にはふさはしかつた。

「先生はどうしたんだ。先刻から寢てるぢやないか。」

醫師は椅子の背によつかゝつたまゝ、奥の室にながしめを送りながら眼鏡にきいた。

「先生は駄目だ。例の通りへゞりやあがつたところへ、知らない人が來たもんだから、いつもの

お株が始まつたのさ。俺は藝術家だ、藝術家だつてね。そいつをよせばいゝのに井上が餘計な事を云やあがるもんだから、美事に硝子杯を叫きつけやあがつた。なあに下らねえのさ。」

「先生のは危なくてしやうがねえや。手あたり次第に叩きつけやあがるもんだもの。」

井上は硝子杯の當つて碎けた壁をかへりみて醫師に話した。

「だけど珍しいいゝ人間だぜ。稼いぢや飲み稼いぢや飲み、それつきり慾もねえんだからな。」

眞赤に醉つた大男は持前の子供らしい聲でしみじみ云つた。

「おらあ先生がゐねえと寂しいや。」

「ほんとだ。少なくとも先生はお前達よりや上等に出來てら。藝術家はあれでなくちやいけないんだ。」

齋藤はいくら飲んでも赤くならないで、うけ口のうすい脣をひるがへして得意さうだつた。

「きいた風な事を云つてやがら。だけどほんとに先生が寢込んじまつちや寂しいや。起してやらうぢやねえか。」

「よせよせ、又硝子杯を割られちや堪らねえや。」
「大丈夫だよ。藝術家がらしときや間ちがひはないんだ。起してやらうぢやないか。」
「起せ起せ。」
大男は立上つて、長椅子の側に寄ると、いきなり兩手を擴げて寢たまゝの先生を宙に持上げて、食卓のところ迄運んで來て、椅子にかけさせた。
「どうした先生、しつかりしろい。」
何時の間にか景氣のいゝ酒宴の始まつてゐた其場の光景を、不思議さうに見てゐる寢呆けた先生の背中を、山根はいやつて程どやしつけた。それでも先生はうすら寒さうに背中を曲げて、ちらかつた食卓の上に視線を落してゐたが、急に大きなあくびをした。その縮こまつた痩つぽちの姿がとぼけてゐるので一齊に笑つた。
「先生、一杯。」
大男は自分の硝子杯を干して先生の手に持たせた。

「よせよせ、僕は飲まないよ。」
手を引込めてしまふ先生の態度は醉つた時に似ず、いぢらしい程弱々しく、言葉つきも叮嚀になれば、その顏には羞しさうな表情さへも現れた。
「何を云つてやがんでえ、飲まないつて奴があるもんか。」
齋藤は遠くから手をのばして注がうとする。
「だけどもう先刻大分飲んだからね。」
先生はうぢうぢしながら手を出したが、ごぼごぼといゝ音をさせて金色の酒が硝子杯の中に漲り入るのを見ると、もう目を細くして口を寄せるのであつた。
「アア、矢張りうまいや。」
ぶるぶる震へる手の硝子杯を高く燈火に透かして見たが、今度は勢ひよく一息に飲み干した。
「ハイ、おかはり。」
大男は間も置かず、又注いだ。

三杯四杯と立てつゞけに飲むうちに、先生の顔には酒の氣があふれて、目には凄みが現れ、言葉も亦亂暴になつて來た。震へる手で注いでは震へる手で飲んだ。

「先生、先生がゐなくちやあ寂しいとさ。何か唄でもうたはふぢやねえか。」

「俺は唄なんかうたへねえや。」

先生はさもさげすんだやうな顔をして大男をかへりみた。

「そんな事を云はねえで、何かおやりよ。」

からかふのか、おだてるのか、しきりにしつつこくすゝめてゐたが、

「ねえ君、そつちの先生。」

と今度は梁瀬の方に聲をかけた。

「今、日本ぢやあどんな唄が流行つてますね。」

「さうですねえ、どんな唄が流行つてゐるんでせう、僕はそんな事はちつとも知りませんよ。」

「へッ、氣取つてやがら。」

大男は強く云ひ捨てたが、そのまゝ天井をむいて、

「花よりあくるみよし野の……」

と咽喉をつまらせて、うたひ出した。

「よせ、よせ。」

先生は苦い顔をして大男を止めた。

「よさねえ、よさねえ。默つて聞いといで。——花よりあくるみよし野の、春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も……。」

「よせつたら、よせッ。」

ぴしやりと大男の横つつらを平手で張り飛ばした。

「ハハハハ、こいつあ面白え、俺あ先生になぐられるんなら、いくらでもなぐられてやらあ、ハハハハ。」

大男はかへつてい〻機嫌で笑つてゐる。

「馬鹿ッ。」

今度は半分飲んだ麥酒を、その笑つてゐる赤い顏にぶちまけた。

「ハハハハ、こいつあ面白えや。」

大男は平氣で笑つてゐる。麥酒の雫は、鼻から頰つぺたから顎からしたゝり落ちて胸を濡らした。

片方では齋藤が梁瀨を捕へて、身の上話を聞かせてゐる。これも勞働しては學校へ通ひ、金が盡きては又やめる生活をして來たが、今はこの市の醫學校に通つてゐるのだ。來年の夏はうんと稼いで、秋の新學期には日大學へ入り度い、さうすれは同窓になるのだから、よろしく賴むといふ意味の事を繰返して云つた。

「僕はもう日本へなんか歸らない。もう吾々のやうに長く此方にゐると、とてもけちくさい島國なんかには住まへやしない。」

彼は亞米利加の自主自由を說いたあげくに、半解の社會主義者的口吻で故國を罵つた。

「お前は歸り度くないだらうよ、れこが放すめえもの。」

眼鏡は隣から話を聞き嚙つて、口を入れた。

「君、君。こいつはね、電話係をだまかして、夫婦約束をしてやがるんだぜ。」

と梁瀨の方に聲をかけた。

「彼女は面はまづいけれど肉體はいゝね。俺に裸體を畫かしてくれねえかなあ。」

井上もそばからひかける。

「生意氣云つてやがら、貴樣なんかに何が畫けるもんか。」

「それでもこいつは裸體はうまいかもしれないぞ。」

「井上君は裸體專門さ。何時だつて美術館の裸體の像ばかり寫生して來るぢやないか。」

と醫師も面白づくで仲間に加はつて來た。

「近頃はどんなものを畫いてんだい。見るよ。」

眼鏡は云ひながら手を延して、後の棚の上に先刻井上が置いた畫板を取下した。

「ね、こんなものばかり畫いてやがるんだ。」

彼はそれを梁瀬に渡した。手に取つて見ると鉛筆の裸身像は思ひ切つて拙かつた。殊に陰影が出たらめなので、まるみのある彫刻の面白さは消えて、平つたいものになつてゐた。

「なんだ、なんだ。女の繪か。」

大男は遠くから延び上つて見たが、椅子を離れて來た。

「よせよせ。井上の繪なんか見るない。」

先生は口に含んだ麥酒を口尻から垂らしながら怒鳴つたが、自分も立上つてよろけながらやつて來た。

「なんだ、こりやあ。こんなもなあ繪ぢやあねえや。」

先生は癇に障つた顔をして、とろんこの目で井上を睨んだが、いきなり彼の頭をひつぱたいた。

「馬鹿ッ。貴樣はなんだ、貴樣は。貴樣は職人だい、技倆のねえ職人なんだ。」

彼の顔は眞青になつて、顏中が痙攣してゐる。

「亂暴はよせよ、先生。井上君もなかなかうめえぢやねえか。この腹んとこなんか堪らねえな。」

大男は卑猥な事をつけ加へて云つた。

「ば、ばかッ。」

力を込めて怒鳴つたが、聲はかすれて咽喉にからんでしまつたので、先生は一層蒼くなつて震へた。

「默つてろい、貴樣なんかに藝術がわかるもんか。運轉手め、俺は、俺は……」

聲は全く涸れて、先生の口はこはばつてしまつた。

「俺は藝術家だつていふんだらう、なあ先生。」

「ば、ばかッ。」

先生の手が上つたかと思ふと、齋藤の胸から顏にかけて飯粒が散亂した。喰ひ殘しの飯の入つた茶碗を投げつけたのである。

「何をしやがんでえ。いゝ加減にしろい。」

齋藤は怒つた顔をしたが、直ぐに忘れてしまつて、胸や膝にこぼれた飯粒を一つ一つ拾つては口に入れて喰つた。

「亂暴はよせよ、先生。今夜はお客もゐるんだし、愉快に飲まうぢやないか。」

醫師が云ふと、

「ほんとだぜ、俺の退院祝ひなんだ。唄でもうたつてくれよ。」

大男は先生の背中に手を廻してなだめた。

「俺は、俺は亂暴なんかしない。俺は藝術家だ。」

先生は又繰返して云ひ出した。

「オイ君は藝術はわかるか。」

と梁瀬の方に近寄つて來た。

「僕は藝術家なんだ。井上なんかあいつは職人だ。いゝか、わかつたか。」

「わかつた、わかつた。」

梁瀬は大きな聲で叫んだ。

「イイヤ、わからない。わかるもんかい。一體貴樣はなんだ。藝術家ぢやあるまい。」

「僕か、僕は藝術家ぢやないさ。たゞの醉拂ひだよ。」

梁瀬は面倒臭くなつて突慳貪に答へた。

「馬鹿ッ。」

耳元で叫んだと思ふと、梁瀬の顔にしたゝか麥酒を浴びせかけた。何を、と思つて立上つた時、先生は素早く食卓の上に倒れてゐた麥酒瓶を取ると梁瀬を目がけて打ち下した。危ない、と顔を防いだ二の腕は手ひどく打たれたが、直ぐに相手の手首をつかんで梁瀬は麥酒瓶をもぎ取つた。

「危ねえ、危ねえ。」

「よせよせ。」

口々に叫んで一座は立上つて、二人の間に割つて入つた。混亂の中で人の體に押されて傾いた食卓の上の器物は滑つて碎けた。はげしい物音の中に、硝子のこはれる響が冴えて聞えた。

氣がつくと梁瀬は後から齋藤に抱き止められてゐた。酒の後の息切れがはげしく胸に波を打つた。

「馬鹿ッ、馬鹿野郎。」

先生はみんなに兩手をつかまへられながら、身をもがいて敵に向はうとあせつてゐる。

「どうしたんだ、先生。」

「こいつの面が氣に喰はねえんだ、畜生ッ。」

「ハハハハ、やりやあがつた、先生。」

大男は面白さうに笑つて、先生の肩をつかまへると押しつぶすやうに椅子にかけさせてしまつた。

「ナニ僕は亂暴しやあしない。」

梁瀬はいかにも平氣だといふ落つきを見せて人々に云つた。

「馬鹿ッ。そん畜生を追拂へ。」

先生は又猛然とたけつて、足をあげて食卓を蹴つた。食卓も椅子も梁瀬の方に倒れかゝつた。

「危ねえ。」

後から齋藤、前からは大男が叫んだ時、梁瀬は思はず知らず、麥酒瓶を振り上げてゐた。

「危ねえ、危ねえ。」

大男は梁瀬の腕をつかむと馬鹿力を出して戸口迄押しつけて、そのまゝ室の戸をあけると、梭から抱き止めた齋藤もろともに室外の廊下に押し出してしまつた。折重なつて倒れさうになつたからだを立て直した時、目の前の室の戸はひどい音をさせてしまつた。

梁瀬はそれをあけようとしたが、どうしてもあかないので、癪に障つて蹴飛ばしたが内からは返事がないので、しかたが無く階段を階下へ降り始めた。

「君、君。待ちたまへ。」

齋藤が後から呼んだので、わざと急いで馳け下りた。

「外套と帽子を置いて來たらう、歸るんなら僕が取つて來てやらう。」

出口で追ひついた齋藤は云ひ殘して、又階段を上つて行つた。

戸外は霧の夜で、往來に出ると冷たい雨が感じられた。氣がつくとまだ麥酒瓶を手に提げてゐた。梁瀬は自分のした事を悔いた。あんな醉拂ひを相手に立廻らうとした、はしたない自分が忌々しかつた。殊に今、この夜更けの大道に麥酒瓶をぶらさげて立つてゐる自分が癪に障つて堪らないので、いきなり瓶を舗石の上に叩きつけると、はけしい音を立てゝ、こな〳〵に碎けた硝子の破片は四方八方に飛び散つて、彼自身のからだにもはねかへつて當つた。

一臺の自働車が凄い程大道を射照して過ぎた。

「馬鹿ッ。」

彼は大きな聲で叫んだ。堂々と走り過ぎた自働車と、脆くも碎けて散つた空瓶と、自分自身をひつくるめて罵つた氣がした。

「失敬、失敬。どうも待たせちやつた。」

齋藤は梁瀬の帽子と外套を抱へて出て來た。自分も身支度をしてゐる。梁瀬はひつたくるやう

に受取つた外套を着て默つて歩き出した。

「君怒つてるのかい。」

齋藤も並んで歩きながら云つた。

「怒つてやしないさ。」

「怒るのはよしたまへ。つまらないよ、あんな奴等を相手にして。」

苛々してゐる梁瀬は此の男がうるさくて堪らなかつた。俄に醉が出たやうに、歩くと足下の定らない自分よりも、彼が一層千鳥足なのさへ癪に障つた。

「あいつらはみんな取るに足りない奴だぜ。あの醉拂ひと來ちやあ、あれは誰とでもやるんだ。もう酒精中毒でばかみたいなものさ。悲慘だねえ、あゝなつちやあ。しかしあれでもまだいゝ方なんだ。他の連中と來たら全く零だ。醫師だつて以前は水夫なんだからね。そりや勉強しとげた努力は買ふさ。しかし吾々のやうに順序を追つて高等教育をうけた者から見ると、そりやあ全く非常識だよ。云ふ事をみたまへ、淺薄ぢやないか。」

齋藤は默々として歩いてゐる梁瀬を追掛けながら、のべつにしやべり出した。梁瀬は闇の中にも彼のうけ口のうす脣のぺらぺらひるがへるのを感じた。

「山根なんて奴は、ありやねえ、決してつきあつちやいけないぜ。あいつは學校へなんか通つてやしないんだ。自分ぢやあ法律學校の生徒だつて云つてるけれど、そりやあ一時は籍位あつたかもしれないが、――兎に角今はごろつきさ。」

なんといつても返事をしないで、さつさと歩いてゆく相手の脊中に話しながら、彼は醉拂つた足をふみしめふみしめ急いだ。

梁瀬はどつちの方角に自分の下宿のあるC町があるのか、其處へ歸る地下鐵道の停車場は何處にあるのか、全く知らなかつた。行手の霧の中に滲んでゐる街燈ばかりが頼られる心持で歩いた。その所々の街燈のそばに來ると、近くの家のあかりの屆く部分丈は明瞭見えるが、高い三階四階は眞暗な空の中に吸ひ込まれて、物音も響かない夜更けであつた。雨とも霧とも區別のつかない程細かい雨は冷たい闇を濡らしてゐる。人道も車道も濡れて、二人の靴の音は陰氣に耳につ

いて來た。帽子も濡れた。外套も濡れた。人通りは殆んど絶えて、所々の酒屋ばかりが、まだ殘つてゐる客の爲に戸を鎖さないばかりだ。

「ハロオ。」

擦れちがひざまに聲をかけたものがあつた。女だ。ふりかへると立止つて此方を見たが、ものにならないと見極めて、又霧の中に見えなくなつた。黑い衣服に黑い帽子をかぶつた下から眞白に塗つた顏を見せて笑つたが、女は決して若くなかつた。

「へン、お茶挽め。」

齋藤は忌々しさうに唾をした。

間も無く二人は廣い四辻に出た。梁瀬はそのどつちに行く自分だらうと考へて、足を停めた。

「君は直ぐ歸るのか。」

齋藤は追ひついて云つた。

「僕は咽喉が乾いちやつた。そこいらで一杯麥酒を飲まう。」

梁瀬は返事もしずに相手を見下して立つてゐたが、自分も急いで歩いて來たので、咽喉が乾いて息切れがした。だから此の申出は拒まなかつた。

「向う側の角の酒屋は遲くまで開いてる筈だ。」

齋藤は梁瀬の腕をつかんで、廣々と濡れた道路を横切つて、向う側のその家につれて行つた。酒場には三四人、うす汚ない男が立飲みをしてゐる丈だつたが、奥の一室からは自働洋琴らしい單調な音樂と一緒に入りまじつた男女の聲が賑かに聞えて來た。誰か踊つてでもゐるやうな、床の上に靴の擦れる音もまじつた。

二人は默つて麥酒を飲んだ。齋藤が勝手に命じた二杯目を飲み干すと、梁瀬は勘定をして戸外に出た。

「オイ、オイ、そつちぢやあ方角が違ふぜ。」

後からついて出た齋藤は大きな聲で叫んだ。

「何處に行くんだい、君は。」

「うちに歸るんだ。」

梁瀬はふりかへつて答へた。

「C町ならそつちぢやないよ。まるで反對だ。」

齋藤はさもをかしさうに笑つた。

「僕が送つてつてやるから大丈夫だよ。」

「冗談ぢやない、此の夜更けに送つて來られてたまるもんか。地下鐵道の停車場さへ敎へてくれりやあいゝんだ。」

「いゝよ、送つてくよ。」

齋藤はいゝ機嫌で、梁瀬の肩に手をかけて歩き出した。

「わからないなあ、送つたりされちやあ此方が迷惑なんだ。」

梁瀬は相手の手を拂ひのけて急いだ。若し停車場迄の道が違ければ、自働車に乘ればいゝんだと思つた。今の酒屋の角に二臺並んでゐたのを忘れなかつた。

「威張つたつて駄目だよ、方角もわからないくせに。」

齋藤はしつつこくついて來る。

「君の室は度いんだらう。寢床は二人寢かい。」

梁瀬は二度目の酒が廻るとともに、此の男のわけのわからないのが我慢出來なくなつて來た。

「君はいくら室代を拂つてるんだい。」

齋藤はそんな事には頓着なく追ひかけて質問する。

「三弗か四弗位だらう、彼處いらは。ね、さうだらう、四弗位拂つてるんだらう。」

「五弗だよ。」

「五弗、驚くなあ、一室だらう。一室に五弗拂ふなんてそんな無駄な事があるもんか。僕が一緒にゐりやあうまく處理して安く暮らさせるがな。」

彼は又親しさを見せるつもりなのだらう、梁瀬の肩に手をかけた。

梁瀬は此の男が自分を金持だと思つて、親切ごかしで爲にするつもりに違ひないと思ふと、な

んだか非道く馬鹿にされたやうで、一層苛々して來た。

「そりや引越した方が得だ。週に四弗出しや立派な室があらあ。それで僕を置いてくれりや、飯は自炊で安く暮らせるんだがな。——君、さうしないか。僕は掃除でもなんでもするよ。君の英語の勉強の援助もするよ。」

梁瀬は立停つて、彼の手を拂ひのけた。

「實際その方が君の爲だぜ。僕を一緒に置いてくれたまへ。」

まだしやべりつゞける相手を見てゐると、震へる程癇癪が起きて來た。

「ね、さうしないか。一緒に置いて……。」

「うるさいなあ。」

梁瀬は益々近寄つて來る齋藤の胸を突飛ばした。よろ〳〵とよろけかゝつた。危ふく踏み止つて、

「何をするんだい。君の爲を思つて云つてるんぢやないか。」

齋藤は聲を高くして梁瀬に迫つた。

「君が新米で、此の國の樣子も解らないだらうから、心配してやるんぢやないか。僕を一緒に置いてくれりやあ、君の爲になるんだ。ね、君の爲なんだ。」

彼は梁瀬の顏をのぞき込んで、少しからむやうに迫つた。

「うるさい奴だなあ。餘計なお世話ぢやないか。」

梁瀬は又力を込めて突飛ばした。

「何をしやがんでえ。」

「なんだと。」

梁瀬は相手の腕をつかむと、いきなり足をからんで投げた。とつさの間に、あゝ俺は醉つてるなと思つたが、もう止める事は出來ないで投げた。

「馬鹿ッ。」

云ひ捨てゝ彼は馳け出した。

「ヤイ待て……畜生ッ。」

後を見ると、齋藤は起上つて追つかけて來る。梁瀬は雨に濡れた大通を一散に馳け出した。興奮した顏に降りかゝる霧雨がいゝ氣持だつた。

次の四辻迄來てふりかへると、霧にかくれて人は見えないが、氣のせゐか齋藤が今にもその霧の中から出て來さうに思はれ、足音さへ聞えるやうに感じた。彼は又一丁場走つた。さうしてその次の辻にあてもなく客を待つ自働車を見ると、いきなり馳け寄つて呼んだ。

「自働車、自働車。」

云ひながら自分で戸を開けて中に入つて、行先きを敎へると、居眠りをしてゐたらしい運轉手はあわたゞしく支度を始めた。

酒の醉は一時に頭に上つて胸苦しかつたが、梁瀬は大きな危難を遁れたやうな安心を覺えて、ぐつたりと後によりかゝつた。

自働車ははげしい音を立てゝ、霧に包まれた夜更けの大都を、眞直ぐに貫いて走り出した。

（大正六年九月二十日）

ベルファストの一日

昨夜グラスゴオを出た船は曉方ベルファストに着いた。

獨逸の潜航艇が出沒するといふ噂に、乘組も客も、星の光のうす青く流れた海の面を、恐怖を以て眺めたが、燈火を減した船は搖れもせず、靜かに水の上を滑つたのである。

倫敦を出てから二週間近くなるのに、一日も完全に晴れわたつた青空を見た事が無く、毎日毎日雨に濡れた束條は、人々が船室に下りて寢靜まつた後迄、一人甲板に殘つて、水氣を含んだ雨後の空に數を盡してきらめく星を仰ぎ見てなつかしんだ。彼はその時今宵程、清淨な心持の自分を幾年にも見た事が無いと思つた、潜航艇に襲擊されて、船と共に沈んでも、かかる美しい空の下の靜かな海ならば、寧ろ望ましいとさへ、ふと考へた程靜寂な天地の間に、自分の孤獨を嬉しく思つたのである。

それには住み馴れた倫敦の汚れ腐つた生活に、身も心も悉く衰へた獸のやうな自分を忌々し

く思ひながら、如何しても桎梏から逃れられず、夏は秋になり、冬は春になり、又しても都會には暑い夏が廻つて來たが、激しい努力を自分一人で經驗した後で、漸く旅へ逃れ出た人の知らない安心も、東條の心を平靜な世界へ導いたようすがとなつて居たであらう、

夜更けて海は暗くなり、うす霧が一面に漲つて、機關の音ばかりが妙に冴え冴えと響くのを、遲く寐床に入つた彼は眠られぬまま氣に掛けて、暫時は右に左に枕をしかへたが、遂には外套のかくしに入れてあつたブランディの小瓶を取出して飲んだ。少量の酒ながら存外よく利いて、醉心地になると、流石に旅の疲勞から、今度はかへつて前後も知らず熟睡した。

今朝、頭の上を歩く人の足音に目の覺めた時は、船はもう愛蘭土の港に近く進んで居た。狼狽てて飛起きて、狼狽てて衣服をつけ、狼狽てて荷物を纏めたが、その時はもう船は棧橋に横づけになつて居た。

先を爭ふ人々の後から、彼は重たく鞄をぶら下げて上陸した。朝霧の底にどつしりと沈んで居るベルファストの未だ目覺めない町の方へぐんぐん歩いて行つた。さうして其の町で一番先に目に

入つた旅舍の開き扉を押して内に入つて行つた。

帳場に控へて居る禿頭のおやぢは、大きな鼈甲緣の眼鏡の下から、ぢつと東條の貧弱な黃色い顏を見上げたが、妙に客馴れた優しい聲で、

「御存じとは存じますが、此頃は警察が馬鹿にやかましいので、旅のお客樣には一度警察へ入國屆を出して頂く事になつて居りますので。」

と宿帳をつけてゐる東條の耳のそば迄顏を寄せて云つた。

「ごらんの通りです。」

と後の壁に貼付けてある外國人の旅客に對する戰時取締令を指差して見せた。

「ア、何處に行つても此頃はこいつが面倒でね。」

英吉利内地の旅で馴れてゐる東條は平氣であつた。

「それよりか兎に角御飯を食べさせてくれないか。一休息してから警察へ行く事にしよう。」

「よろしうございますとも。」

老人は答へながら卓上の呼鈴を鳴して下僕を呼んだ。

愛蘭土人特有の、足の短い、肩幅の不釣合に廣い、險しい顔付の男が出て來て鞄を持つて先に立つた。うす暗い階段を上りながら、東條は自分よりも背の低い下僕に對して優越を感じた。日本人としてはちひさい方では無いのだが、倫敦では殆んど自分より背の低い男は見當らなかつたが、愛蘭土なら、こんな男も多いだらうと、肉體の大きさに威壓され勝だつた大都會をかへりみて、田舍の旅を氣安く思つた。

三階の東向の部屋に彼を導いて、下僕は一片の銀貨を手の平に受取ると、型ばかり頭を下げて立去つた。重たい靴の音が階段を下りて行くのをぼんやり聞いて居たが、それも遠ざかると、人氣の無い旅舍はしんとして古ぼけた。

東條は取殘された頼り無い心持で、建付の悪い古び汚れた家具調度を一順見廻したが、その中に立つ自分の衣服の、雨に濡れ埃にまみれてみすぼらしくなつてゐるのを感じた。彼は鞄を開けて新しい肌着と襯衣を取出さうとしたが、中にはもう、汚れ切つたものばかりで、襟さへうす鼠

色に垢じみたものの他は無かつた。

東條は輕く舌打ちをして、着換は思ひ止り、窓の側の寢臺の上に、靴のままで大の字に寢轉んだ。かういふ所作が、自分の旅の疲勞を最も適切に自分自身に感じさせてやる手段だと、心の底に思ふものがあつた。

鶯茶に眞赤な薔薇の花を染め出した壁紙の、その花の赤い色さへ煤けて黑くなり、所々裂け破れたのを仰ぎ見て居ると、遙々と來た旅人の身の頼り無い靜かな嬉しさが又しても泌々胸に湧いて來る。枕に近い窓の遙かの下の往來には、次第に車馬のゆきかひが繁くなつたらしく、種々入りまじつた物の音が聞えて來た。疲れた瞼を閉ぢて聽くともなしに聞いて居ると、その騷然たる物音にも韻律があるらしく、不知不識睡氣を催して來て、何時の間にか東條は、短い時間の間に深い眠に落ちて行つた。

ふと物音に驚いて目を開いた時、扉の外に人の氣配がして、輕くその扉を叩いた。

「お入り。」

と半分身體を起して叫んだ時、年取つた給仕人がそこから顔を出した。

「食堂の用意が宜しう御座います。」

「難有う、直き行くよ。」

答へながら東條は故意と威勢よく寐臺から床の上に飛下りた。

何時の間たか霧は晴れて、眞青な朝の空に日輪は猛烈に上つて居た。窓の硝子を通して、その暑い夏の光は、此の貧しい旅舍の一室に容赦無く射込んで居た。

嗽ぎ、顔を洗ひ、鏡に向つて頭髪に櫛の目を入れるその鏡にも、日光は反射してまばゆかつた。

雨の後の蒸暑い日が海にも陸にも重たくのしかかつて來たのである。

だだつ廣い食堂には五六人の客が各々友だちも無く、ちりぢりに卓に就いて居た。東條はその人々の異國人に對する好奇の視線を一身に浴びながら、粗末な朝飯の肉刀と肉叉を取上げた。

食後は又部屋に歸つて、一人ぼつちの煙草を樂しんだ。あけ放した窓から露臺に出て見ると、目の下の町の家々は戸をあけて、今日の商賣を營み始めた。電車が通る、自働車が通る、馬車が通

る、人が通る。高い處から下を見下す時に何時も感じる自分の方が下の人間よりも偉いと思ふ根柢の無い好い氣持が、食後の彼を滿足させた事は云ふ迄も無い。目を遠くに送ると、向う側の家々の屋根を越えて、今朝上陸した海岸が明瞭に日に光つて居る。川口を出て行く船と入つて來る船が、うすい煙を水の上の空に靡かしてゆきちがふ。東條も煙草の烟を同じその夏の青空に向つてゆるゆると鼻の孔から立昇らせた。

警察の所在を訊ねて、暑い往來へ出たのは既に正午近かつた。今日は恰度傷病兵慰問の爲めの花の日で、市中には若い女が手に手に花籠を提げて歩いて居る。一樣に白い衣服を着た花賣は、燒けつくやうな大道に、くつきりと浮んで見えた、彼等は道行く人の總てに花を勸めたが、珍しい東洋人の姿は直ぐに彼等の目についた。あつちからもこつちからも集つて來て、一齊にからかふやうに花籠をさしつける。東條は故意とその女達を押しのけて、後の方に立つて居る惡强ひをしない一人に此方から近づいて、その掌に一片の銀貨を載せた。

若い娘は手首に掛けた花籠を東條の目の前に捧げて、

「薔薇がお好きですか、撫子がお好きですか。」

と少し首をかしげて聞いた。つばの廣い夏帽子にかくれ勝だつた顔が、あからさまに日に照らされて、大きな目とちひさな脣が、無邪氣にほほ笑んだ。

「撫子にして下さい。」

東條は隔意の無い氣輕さで答へた。

「色は何にしませう。赤ですか、白ですか、もも色ですか。」

娘は又首をかしげて、東條を見上げた。

「貴方の一番好きなのを擇んで下さい。」

東條は口の邊に微笑を浮べながら、娘のその大きな青い目を正面から見た。娘はふと顔を染めて花籠に目を落したが、二人を物珍しさうに取卷いてゐた他の花賣は一齊に面白さうに笑つた。當の娘は一寸考へる振をしたが、默つてもも色の撫子を籠から拔いて東條の胸にさした。

「難有う。」

東條は帽子を取つて挨拶して別れて歩き出した。

「難有う、日本のお方。」

娘も彼を見送つて云つた。ふりかへると、その娘も連の花賣達も一齊に手をあげて振つた。東條はもう一度帽子を取つて應へて、さて四辻を海手へ曲つて別れた。一生の中に二度逢ふ事も無い娘と口をきいた旅人の心持で、その大きな青い目とちひさな紅い脣を、無責任に思ひかへして忘れなかつた。

煉瓦造の倉庫の立並ぶ海岸の石垣には、何を入れて來たのか大きな樽が、幾つも幾つも轉がつて居て、その附近には荷揚人足が呑氣に働いて居た。どれもこれも怠惰者らしい風をして、マドロス・パイプをくはへながら重たい足を引摺つてゐるのを、東條は倫敦で見たダブリンの一座の演じたシングやグレゴリイ夫人の戯曲そのものを見る興味で見て過ぎた。警察は此の海岸の裏通りにあつた。

煉瓦造の粗末な建築物の入口の石段に立つて居る見上げるばかりの大男の巡査に來意を告げる

と、大男は珍しさうに東洋人の黄色い顔を見下しながら、子供をあやすやうな態度で東條を控室に導いた。其處には四五人、何れも國籍の違ふのが手に手に旅券を持つて不安な顔付で待つて居た。佛蘭西らしいのも、伊太利らしいのも、露西亞らしいのも、どれもこれも多少不安らしいまごついた態度で控へて居た。或者の旅券には其の寫眞さへ貼付けてあつた。

順番が廻つて來て、東條は奥の一室に呼込まれた。いかにも探偵らしい顔付の男が、後から後から入つて來る旅客を、一人一人訊問した。國籍、年齢、職業、旅行の目的、昨夜の滯在地、明日の行先と順々に訊ねた後で、鼻の尖の赤い係の役人は、旅券と特別入國許可證とを幾度も繰返して讀んでは、東條の顔を珍しさうに眺めた。

「エ、と、國籍日本、年齢廿六歳。特徴は髪黒く、皮膚蒡色なりか、ハツハツハツハ……」

彼は舞智な人間に特有の單純な高笑をして、改めて東條を見た。

「廿六歳とは想像も出來なかつた。十八九かと思つてゐた。」

机を並べて居る同僚に、その小役人は同意を求めた。

「サア、十八九とも見えないが、少なくとも廿歳か一だね。」

眼鏡の下に目やにのたまつた目をしばだたいて、古手の役人はしげしげと東條を見上げた。

「日本人は小柄だから若々しく見えるのでせう。兎に角僕は急ぐんだから、早く許可の印を押して下さい。」

東條は稍突けんどんな調子で促した。

「だが、一體君は歐洲戰爭についてどんな意見を持つてゐるね。」

係の男は落つき拂つて許可の印を押しながら、此の日本人と問答をするのが面白くて堪らないらしく思はれた。

「左樣、此の暑さでは兵隊もさぞかし堪るまいと思ひますよ。」

東條は苛々して、額の汗を拭きながら、故意とわき道へそれた返事をした。

「ハツハツハツハツハ。」

役人は何が可笑しいのか、そりかへつて足踏をして笑つた。東條はその馬鹿々々しさに堪へか

ねて、手を延して旅券を引つたくると、急いで戸外に馳出した。馬鹿にしてゐやがると思つた時、彼は額から背中から襟から胸迄、蒸される暑氣に汗になつて、襯衣も襟も肌にぴつたり吸ひついて居るのを感じた。

正午の日は海にも陸にも漲りわたり、ぎらぎら油光に光る潮水は川をさか上り、土が含んだ雨の濕氣は見る間に乾いて、往來には片影も無くなつた。東條は、天も地も町も、一切のものの存在が放散する暑氣の中を、あてども無く町筋へ歩いて行つた。今朝よりももつと繁くなつた人通りの中を、花を賣る娘達は數を增して、その白衣ばかりが僅かに涼しさを覺えさせるばかりであつた。彼はふと立止つて、胸にさされた撫子を取つて鼻に觸れてみた。甘つたるい匂は目に泌み入る程深かつた。

これからさき如何しようと、目的も計畫も無い東條は、暫時辻に立つて考へたが、兎に角案内記でも買つて、市中を見物する事だと、本屋を見付けて入つて、小形の愛蘭土案内記を買つた。其處を出ると、今度はその案内記を讀む爲めに一軒の茶店に入つて行つた。一隅の卓子に空席を見

付けて坐ると、壁に仕掛けた扇風器が、汗に濡れた額に垂れかかる髪の毛を吹きちらす程強く廻り出した。

手輕な食事の後で、一片の檸檬を切込んだ紅茶の冷したのをおかはりして飲みながら、東條は今買つた案内記を開いて見た。

ベルファストは、北緯五十四度三十六分、西經五度五十六分、面積一萬五千四エエカア、人口三十八萬五千四百九十二人(但し一千九百十一年調)、議會へ代議士四人を送る、と冒頭に書いてあつた。汽車、電車、蒸汽船の便、旅舍飲食店の案内から簡單な歴史地理、商工業の現狀迄、東條は殘らず讀んだ。

「何を讀んでいらつしやるの。」

傍に立つて物珍しさうに注視して居る給仕の女は、自分が地圖を開いて見てゐる後から顏を差出して云つた。まるまると肥つた頰邊の赤過る程赤いのが、初めて日本人を見たといふやうな素振りをかくす事が出來なかつた。

「ベルファストの案内記さ。わざわざ日本から貴方の國を見に來たとは信じられないだらう。」

「日本。日本てあの露西亞と戰をした國ですか。」

「ア、その日本さ。」

「隨分遠いんでせうねえ。」

「遠いとも、船で二月もかかるよ。」

「二月。」

女は目をまあるくみはつて驚いた。

「それぢやあ、そろそろ貴方のベルファストを拜見して來ようか。」

勘定を濟して、

「左樣なら。」

「御きげんよう。」

東條は給仕の女にも輕い言葉を殘して茶店を出た。

彼は案内記の導くままに、此の市の有名な建築物を、ひとつひとつ訪問した。市廳、裁判所、監獄、工業學校、圖書館、病院、養育院、教會、郵便局 それからそれと見て廻つたが、それは單に機械的に見物したので、勿論面白いとも思はなかつた。夏の午後の日は一層暑氣を增して、東條は汗もしとゞに濡れた。一體全體何の爲に自分は斯うベルファストの町を見物して歩かなければならないのか、とふと考へて苦笑した。世間普通の旅客が、初めての土地へ行くと、名所舊跡を必ず見廻るのが當然だと云ふ慣習に不知不識誘はれてゐたのであらう。彼は町はづれの埃の多い大通を歩きながら自分を馬鹿馬鹿しく思ふのが寂しかつた。彼は幾度路傍の並木の樹陰に佇んで、まだ高い太陽を仰いで退屈したかわからない。乾いた土を踏む足も靴の中で蒸されて重くなつた。

最後に東條は大學の築地に倚つて、如何にして殘る今日の時間を消さうか思ひ惱んだ。夏期休暇中の大學は、病院として使用され、戰地から送還された負傷兵は、芝生の上で庭球や球轉がしをやつて居る。或者は松葉杖に縋つたまま球を轉がし、或者は切斷され殘つた片腕にラケットを

振つて、嬉々として遊んで居た。戰友同志抱合つて、炎天の芝生の上に寐轉んで居るのもあつた。疲れ切つた東條は、それを何の反應も無い、自分自身も傷病兵の一人だつたかのやうなほんやりした事を感じながら眺めた。

「一寸伺ひます。」

突然耳の側で呼掛けられて、東條は驚いてふりかへつた。人品のいい老人が叮嚀に帽子を取つて、

「突然話掛ける失禮を許して下さい。お見掛けしたところ、貴方は東洋から來た方と思ふが、東洋は日本ではありませんか。」

「左樣です、私は日本人です。」

東條も帽子を取つて答へて、改めて老人を見た。ふちの廣い夏帽子をぬいだ赤く光る頭を覆ふ髪は雪白で、短く刈込んだ口髭も、顎髭も同じく眞白だつた。輪廓の正しいいい顏で、光の鈍つて優しくなつた目の切れの長いのと、思ひ切つてちひさい赤坊のやうな脣が、初對面の旅人にも

隔意のない心持を持たせるのである。派手な白と鼠の格子縞の服に、淡紅色の襟飾を綺麗に結んだのが、老人を舞臺の人のやうに見せた。

「確に日本の人だと思ひましたよ。一體此の國には何をしに來たのです。」

「この國つて愛蘭土の事ですか。愛蘭土にはたゞ見物に來たのです。」

「ホウ、日本から愛蘭土を見物に。」

老人はちひさい口を一層ちいさくして驚いた顏をして見せた。

「いいえ、左樣ぢやありません。私は永らく倫敦に勉强に來てゐるのです。恰度夏休を利用して英吉利内地から蘇格蘭土を廻つて、今朝ベルファストに着いたところです。」

「フムフム、それで此處には永く居るつもりですか。」

「いいえ、明日はダブリンに行かうと思つて居ます。今朝から市中を見物して、もう行く所が無くて困つて居る位です。旅舍へ歸るのも馬鹿々々しいし、如何しようかと思つて考へて居たところです。」

東條は手にした案内記を老人の目の前で開いて見せた。

「フム、市中は見物してしまつたと。そんなら私の宅へ遊びにお出でなさい、直き其處ですよ。」

老人は極めてそれがあたりまへの態度で、向側の横に折れ曲つた道を指し示したが、東條はあまり唐突な誘引に驚いて、何と返事をしていいかわからなかつた。

「直き其處ですよ。」

老人は繰返して、

「實は少々伺ひ度い事もあるので。」

と附け足した。東條の好奇心は勿論此の時動いたが、なんだか未知の世界に入つて行く不安と、其處には何かしら面倒が待構へて居るらしい豫感を打消す事が出來なかつた。

「難有う。しかし未だ日も高いから、有名なヂヤイアンツ・リングに行つて見ようかと思ふのです。」

と突嗟に思ひ付いた事を答へながら、それをまぎらす爲に時計を出して見た。案内記で讀んで

知つては居たのだが、市外を四哩も離れて居る上、電車の便利も無いといふので、わざわざ行つて見ようとは思つてゐなかつたが、老人の誘引を斷る爲に心にも無く口に出してしまつた。

「ホウ、ヂヤイアンツ・リング、ヂヤイアンツ・リングなら私が案内しよう。迷惑でなければ。」

老人は、もう身支度も出來たといふやうに、小腋に抱へて居た夏帽子をかぶり、杖でこつこつと足下を突ついて云つた。

「けれども、貴方は御忙しいんではないんですか、」

東條は老人の親切さうな無邪氣な顏を見て、斷り切れないで困つてしまつた。

「私が忙しくはないかつて。ハハハハ、此の老人が忙しい事があるものか。もつとも迷惑なら爲方が無いけれど、さうで無ければ私に案内をさせて貰ひませう。」

「難有う、難有う。」

東條は迷惑しながらも、口では感謝の言葉を繰返さなければならなかつた。

「サア行くなら、早い方がいい。」

老人は時計を見て促した。

二人は並んで歩き出したが、東條は其時初めて、老人が跛を引いてゐるのに氣が付いた。

並木の影は著しく斜になつたが、かへつて日ざしは強くなつた。午後の乾き切つた往來は輕い埃を浮べたまま、何處迄も何處迄も、遠くの山の方迄續いて居る。少し背中を曲けて、不自由な足取で歩いてゐる老人を見ると、東條には四哩の行手が氣づかはれて爲方が無かつた。

「ヂヤイアンツ●リング迄は隨分遠いんぢやないんですか。」

彼は遠慮しながらも、自分を案内しようといふ老人を思ひ止らせようと努めた。

「フム、それ程でもない。」

老人は息切れのする樣子だつたが、それでも跛の足は停めようともしない。

「でも、これから歩いては大變でせう。」

「アアその事か。それは心配には及びませんよ。どうして此の老人に四哩の道が歩けるものか。」

云ひながら面白さうに高らかに笑つた。

町を愈々出はづれようとする三叉の辻に出た。往來の眞中に石磐があつて、なみなみと水を湛へた周圍に三輛の馬車が客を待つて居た。木の影の暗い馭者臺には古ぼけた馭者が、馬と共にやすんで居た。

「ジョオジ。」

老人は遠くから手をあげて馭者を呼んだ。

「いいお天氣だね。」

「今日は、旦那。」

「今日は。」

「今日は。」

三人の馭者は老人に答へて、叮嚀に帽子を取つた。

「どうだい、ジョオジ。ヂヤイアンツ●リング迄行つて貰ひ度いんだが。」

「參りませうとも。」

一番年とつた酒肥りの馭者は答へながら、直ぐに手綱を引締めた。

「今日は私のお友だちが遙々來てくれたので、案内役さ。」

云ひながら老人は東條を促して馬車に乘つた。馬車とはいふものの、所謂愛蘭土馬車で、箱も何も無く、板敷に腰掛けたまま、足は宙にぶら下げて居るのである。よく油繪で見る枯草を積む車に似てゐると、東條は珍しいものに思つた。鞭があがると、馬は威勢よく馳出した。

家の數は粗らになり、木立は次第に深くなつて、何時かなだらかな傾斜面を、馬はたてがみを亂して進んだ。

「どうです倫敦は。隅から隅迄知り盡して居るんでせう。」

老人は若々しい調子で云つた。

「それ程でもありません。何分語學が不得手なので。」

「フムフム。しかし君なんかそれ丈話せれば用事は足りるさ。」

「エエ、用事は足りるんですが、會話を樂む丈の餘裕がありませんから、眞の英吉利人の生活を

味ふ事は到底駄目です。」

「フムフム。それで勉强してるのは。」

「近代文學です。私は作家になり度いんです。」

老人の隔意の無い態度に誘はれて、東條は何も很もかくさずに話せる氣安さを喜んだ。

「ホウ、作家に。それぢやあ、學校や圖書館よりも往來の方が勉强になる。」

老人は自分の警句をよろこんで、

「作家は何でも經驗しなくては駄目だ。政治も、經濟も、社交界も、珈琲店も、料理屋も。」

云ひながら東條の肩を叩いて笑つた。

「ね、倫敦はそれにはもつてこいだ。私は若い頃は倫敦に仕んでもゐたし、まだ其頃は元氣もよかつたので、夜は大概珈琲店で暮したりしてね。」

「けれども倫敦には喫茶店は澤山ありますが、珈琲店らしい珈琲店はあまりありませんね。カフエ・ロオヤルの他には。」

「それそれ、私の毎晩通つたのはそのカフエ●ロオヤルですよ。ホウ、君はカフエ●ロオルヤを知つてゐますかね。」

「私は何時でしたか、オスカア●ワイルドの傳記を讀んだ時に、ワイルドが毎日其處でウイスキイ曹達を飲んだといふ事を知つて、好奇心から行つて見たのです。ところが大變氣に入つてしまつて。」

「アア、ワイルドか。彼の男は氣障な奴でね、いやな裝をして來たものでした。しかしよく飲んだよ。まるで海綿だつた。」

「貴方はワイルドを御存じなんですか。」

「知つてるとも、知つてるとも。」

老人は若かつた頃を夢見る顏をして頷いた。

「けれども如何してロオヤルが氣に入つたのです。彼處は私達の巢だつた。」

「左樣ですねえ。第一は靜かなのと、日本人の來ないのが氣に入つたのです。」

「どうして日本人は彼處には行かないのです。」

「つまり女が來ないからでせう。」

「ハハハハハハ。」

老人は車の上にそりかへつて笑つた。

「しかし私なんかもうおしまひだ。此の四五年は癈廢窒斯で足もきかなくなつたし。」

賑かな心持で笑つてゐた老人は、急に聲を低く落して、顏付も暗くなつたが、ふと話を切つて默した。車輪の響が石ころの多い坂道に高く聞える。

低い岡のつらなる空が目の前に開けて、其處いらの麥畑から小鳥が飛立つて、遙かの大空に聲を震はして鳴いた。目の下の谷間には水が流れ、ところどころの百姓家の風見車は長閑に廻つて居る。

「彼處に家が見えるでせう。あれは病院です。」

老人は向うの岡の上の黑い森の中に、屋根を見せて居る建築物を指して云つた。

「彼處で私の妻は亡くなりました。去年の秋です。」

その午後の日の眞正面に當つて、眞赤に、金色に輝く程照付けられてゐる煉瓦造を、遙かにつかしさうに老人は見た。

間もなく馬車は山蔭の凉しい木立の下にとまつた。雜草の花の水泡のやうに淡く浮ぶ草むらの何處かに、水の音の聞えるのを、東條は暫時茫然として聞いた。

「どうです、いい景色でせう。」

いかにもその風景を享樂するやうに、眼鏡の曇を拭いて老人は四圍を眺め廻した。

「これから先は、馬車は行かないから、歩いて貰はなくちやならない。」

彼は說明するやうにつぶやきながら、跛を引いて草の中の小道に入つて行つた。雨の名殘の露であらう、道を妨げる草の葉尖に殘つてゐて、踏み分けてゆくと、草から草に散るのであつた。日影の道は乾き切らず、靴の先も直にしめつて來た。それでも老人は危ない足取の割合に元氣よく先に立つて上つて行つた。

突然頭の上の方で唱歌の聲が起つた。樹々の葉の向うに透いて見える空に震へて、若い女の合唱する歌の聲である。老人は東條をかへりみて面白さうに笑つて見せたが、その儘どんどん進んで行つた。

夏草にかくれ勝だつた目の前が急に廣くなつた時、二人は岡の上の平地に出た。樹木も何も無い廣い草場の周圍を土堤が取卷いてゐるその眞中に、大きな石がただ一つづつしりと腰を据ゑてゐる丈である。しかしそれよりも先に目についたのは、二人の若い女が手を組んで、その草生を散歩してゐる白衣の姿であつた。

「今日は。」

「今日は。」

女は老人を見ると遠くから聲をかけて、手を組んだまま馳け寄つて來た。

「オウ、貴方がたか。今日は。」

老人は嬉しさうに二人の手を取つて振つた。

「その後は別にお變りもありませんか。」

「難有う、ごらんの通り丈夫ですよ。」

老人はその女達の手を放さずに話合つたが、手持無沙汰に佇んで居る東條に氣がつくと、

「こちらは日本から來た私のお友だちですよ。」

と彼を二人に紹介した。

「これはあの向うの、今通つて來た病院の、私の妻が永らく世話になつた人達です。」

老人は女達の手を放し、女は珍しさうに東條の顔を見守りながら握手した。

「ほんとに奥樣は、いい方でしたのにねえ。」

若い看護婦は氣の毒さうに老人を見ながら眉を寄せた。まんまるい顔の、頰の赤い、快活な顔つきにも同情の表情があふれてゐた。老人も女達も、さうして東條も誘はれて、老人の妻の死んだといふ病院の門の方を眺めた。

「これが有名なヂヤイアンツ●リングです。來て見るとつまらない所だけれど、一體案内記には

どんな風に書いてあります。」

東條の手から案内記を受取つた老人は、それを眼鏡に近々と開いて讀んだ。

「ヂヤイアンツ●リングはベルファストより四哩の郊外にありて風景絶佳、愛蘭土の古跡中最も興趣深き所なりか、ハハハハハハ。」

老人はそれを女達に見せて笑つた。

「何しろ大したものだ。この人なんか わざわざ日本から、こればかりを見に來たのださうですよ。」

彼は特有のちひさい只をつぼめて冗談を云つた。

「ほんとですか。」

「ほんとですとも。」

老人は眞顔になつてからかつた。

「アノ、日本にも病院はありますか。」

もう一人の口數の少ない方のが突然東條に問ひ掛けた。これも血色のいい無邪氣に健康な顔をしてゐる。

「ありますとも。」

東條は意外な質問に笑ひながら答へた。

「ありますか。あるなら私一生の中に一度は行つて見度いのです。ですが、お醫者樣や看護婦は日本人ですか。」

「日本人ですとも。」

彼は更に語氣を強くして答へた。

他愛の無い會話が、暫時人々の間にとりかはされたが、その間に日輪は遠慮無く西の空に傾いて行つた。

「オヤオヤ、もう日が暮れてしまふのかしら。」

一人がつぶやいて、

「私達はもう交替時間ですから。」

と別れを告げさうな風を見せた。

「お待ちなさい。別に見るものもない所だから、吾々も町へ歸りませう。」

老人は東條をかへりみて云つた。夕陽の美しい日で、岡の上の空は淡紅色を流して、高く高くゆらいだ。四人はそれを仰ぎ見ながら、前後して草の小道を下りた。

馬車の待つてゐる所へ來ると、老人は女達に勸めて相乘させた。無言の馭者が再び鞭を取上げると、馬車は左右に搖れながら坂道を下り始めた。

「では私達は此處で下して頂きませう。」

途中の別れ道で看護婦は、道端の草の中に下り立つた。

「左樣なら、いつか一度は日本の病院に行くかもしれませんよ。」

「いらつしやい、是非。」

「左樣なら、御きげんよう。」

「左様なら。」

口々に云ひかはしたが、二人の女の姿は、向うの岡へ導く谷間の草の中に見えなくなつた。と思ふと先刻よりも一層高く、細い聲で合唱して行くのが聞えた。空の色はもう黄昏れかけて、岡の上の風は涼しくなつた。輕くなつた馬車は一散に、その夕方の澄んだ空氣の中を走つた。

「アア、病院の灯が見える。」

老人の聲が寂しさうにつぶやくのを聞いた時、向うの岡の森の中のその病院の窓に、かすかな灯影を認めて、東條も何となく心に止めて見守つた。けれどもそれも間も無く、折曲る道の木立にかくれて見えなくなると、無言の人をのせた馬車の車輪の響ばかりが高く響いた。

馬車が市中へ入つて行つた頃は、ベルファストは夜に包まれて、大路小路には灯がついた。先刻來た道をかへるのか、別の道を通るのか、東條にはわからなかつた。默々として並んで掛けて居る老人の安靜を亂し度ないと思ふ心が、彼を寂しく無口にした。

「旦那、何時ものところですか。」

不意に馭者は大きな聲で、ふりかへりもしずに聞いた。

「ア、、勿論。」

老人は低い聲で返事をして又默した。

何時の間にか馬車は大通の一番繁華な場所を、電車と擦れ擦れに走つてゐたが、とある町角の料理屋の前で止つた。

「御苦勞、御苦勞。」

老人は馭者をねぎらひながら、東條の手を肱つて下りた。

「どうです、ちつとはお腹も減つたでせう。」

お愛想を云ひながら、老人は先に立つて内部に入つて行つた。

「いらつしやい、今晩は。」

給仕頭の男は老人を見ると寄つて來て腰をかゞめながら、しかも後に從ふ東條の見馴ない姿を盗み見る事を忘れなかつた。

「何時ものお席が空いて居ります。」

太皷腹の給仕頭は揉手をしながら、しきりにもてなしぶつて、一番奥の一隅に導いた。

「今日は此のお友だちが來て呉れたので、ヂヤイアンツ・リング迄行つて來たところさ。」

老人は室内の輝きわたる電燈の下で、急に活氣付いた顏をして、珍しい黄色人を伴ふ事を自慢さうに話した。

「君は何を飲む。ウイスキイ曹達ですか。」

「結構です。」

東條は何でもかんでも辭退しない人馴れた氣持で、空腹の目の前に溫い肉汁の皿の運ばれるのを待つた。勿論其の家は大した料理屋ではなかつたが、それでも此の町では相應な處なのだらうと東條は考へた。無數の電燈に天井や壁の金ぴかの裝飾はぎらぎら反射し、食卓の上の糊の强い卓布も目の痛くなる程眞白に光つた。隣室は酒場になつてゐるらしく、食卓に酒を運ぶ給仕人は、その間のしきりの戸から絶間なく出たり入つたりした。食堂には音樂は無かつたが、酒場の

方からは酔拂つた洋琴が賑かに聞え、時々は羽目をはづした人々の笑聲が湧きかへるのであつた。

「如何です、倫敦の料理屋とは。」

老人はそのちひさい口に肉片を運びながら、いかにもこんな田舍の料理屋は駄目だといふ調子を見せて云つた。彼は東條を我子のやうにもてなした。

「サアサア、オスカア・ワイルドのやうにお飲みなさい。」

などとからかつて一人悦に入つた。强い酒精は老人の血を若い日の夢にかへらせる力があつた。酒が廻ると、老人の顏には艶が出て、愛嬌のある目も輝き、聲も少し高くなつて、且つ著しく饒舌になつた。好んで倫敦の往來、劇場、寄席、倶樂部、料理屋、珈琲店についての豐富な知識をほこつたが、それには又若い時の二度とは來ない悔恨が一脈の寂しさを添へるのか、ふと彼をして沈思せしめる事もあつた。

「兎に角、旅人程呑氣で面白いものはない。」

老人は東條がしきりに顧つてゐる佛蘭西伊太利の風光を激賞し、それらの土地にも思ふがまま

に行ける東條の若さを羨しがつたが、ふと聲を低くして、

「私も日本に丈はもう一度行つて見度いと思ひますよ。」

と四圍を憚かる樣子でつけ加へた。東條は意外の言葉に驚いて老人を見た。

「實は私は、サアもう昔の話だけれど、日本に行つた事があるのです。其頃は、なんでも世界中を旅行し度いといふ考へでした。長崎、神戸、横濱、東京、私は神戸に一番長くゐました。」

老人は感慨にふけるらしく、その癖妙に落つかない樣子で四圍の人を氣にしながら低い聲で語り續けた。興に乘つて重ねたウイスキイに、ちひさい口も少しばかり締りの無くなつた舌たるさが、老人を子供のやうに思はせた。

「日本でも倫敦に於けると等しく、劇場料理屋で日を暮したのですか、」

「ハハハハハ、左樣いふわけでもないけれど。」

老人は笑つたけれど、それは寧ろ寂しい笑だつた。妙に座が白けて、二人は手持無沙汰の手を同時にウイスキイの酒杯に注けた。

「實は私は貴方に聞いて貰ひ度い事があるのです。」

飲み干した酒杯を置いて東條の顏を見た。しかし又暫時默してから、やうやく口を切つた。

「私にはどうも、日本に自分の子供が生きてゐるやうに思はれて爲方が無いのです。」

「貴方の子供ですつて。」

東條は老人の言葉を信じ兼ねて問ひかへした。

「さうです、私の子供です。」

老人は少しふらふらして來た頭を支へかねるやうに頷いた。

「もう昔の事ですがね、兎に角マダム・バタフライが居たのですよ。」

低い聲でつぶやくやうに云ひながら、彼は食卓の上に手を延し、窮窟な袖をたくし上げて、痩せた腕を見せた。何が起るのかと思ふ不安を覺えながらも、東條はその手首をつかんだ。少したるみの出來た老人の二の腕に、彼は櫻の花の刺青を見た。その櫻の花の中に「はな」と女の名の入れてあるのを見た。